『東京大学言語学論集』**44** (2022.10) e174-e231

古代インド言語科学へのいざない（１）

—パーニニ文典訳注（規則 1.1.1–1.1.75）—

キャット・アダム　アルバー
catt.adam.7c@kyoto-u.ac.jp
川村悠人
ykawamura0619@gmail.com

キーワード：サンスクリット語　パーニニ　古代インドの文法学　印欧語　言語学史

要旨

本稿は、古代インドの文法家パーニニ（Pāṇini）が著した文典『八課集』（*Aṣṭādhyāyī*）を理解するための基本的な情報を紹介した後、『八課集』の規則 1.1.1–1.1.75 に対する日本語の訳注を施すものである。パーニニ文典全体に対する訳注を日本語で出版する計画が進行中であり、本稿はその第一弾にあたる。現在用意が進んでいるこの訳注は、1. 文法規則で使用される単語の語形情報を簡略に示す語釈（gloss）、2. パーニニの文法規則の訳、3. 文法規則の内容に対する略説、4. 文法規則の適用例の提示と説明、という 4 部分からなる。本訳注は、これまで閉ざされてきたパーニニ文法の世界への入り口となり、またパーニニ文法を適切に扱うための便利な工具となることが期待される。

1. はじめに

> この文法は … 人間知性の最も偉大なる記念碑の 1 つである。それは、著者の言語のすべての屈折変化、派生、複合語およびすべての統語的用法を最も詳細に記述したものである。今日に至るまで、これほど完璧に記述された言語は他にない[1]。

古代インドの文法家パーニニ（Pāṇini, 紀元前 5 世紀から紀元前 4 世紀頃）が残した文典『八課集』（*Aṣṭādhyāyī*）は印欧語に属する言語を対象とするものとしては、最古の文典として知られる。アメリカが生んだ大言語学者ブルームフィールドがパーニニ文法学を熟知していたこと、さらにアルゴンキン語の研究の中でパーニニ文法の方法を多く採用していることも知られている。言語学を学んだことがある人ならば、パーニニやパーニニ文法の名をどこかで聞いたことがあるだろう。しかるに、そのようなパーニニ文法が実際にどのようなものなのかを理解して

[1] これは、今なお輝きを失わない古典的名著『言語』（*Language*）の中でレナード・ブルームフィールドがパーニニ文法について語った言葉である（Bloomfield 1933: 11: ‘‘This grammar…is one of the greatest monuments of human intelligence. It describes, with the minutest detail, every inflection, derivation, and composition, and every syntactic usage of its author’s speech. No other language, to this day, has been so perfectly described.’’）

いる者は決して多くはなく、各分野で有効活用されているとは言えないのが現状である。また、サンスクリット語文献の読解を主たる研究方法とする古典インド学者や仏教学者でパーニニの名を知らない者はいないであろうが、そのようなサンスクリット学者であっても、パーニニの文法規則を的確に理解する準備がある者はやはり多くはないはずである。パーニニの文法規則はサンスクリット語文献の至るところに登場して、学者たちを日々苦しめているのである。

このような状況に鑑みて、パーニニ文典全体に対する訳注を日本語で出版する計画が進行中であり、本稿はその第一弾にあたる。現在用意が進んでいるこの訳注は、1. 文法規則で使用される単語の語形情報を簡略に示す語釈（gloss）、2. パーニニの文法規則の訳、3. 文法規則の内容に対する略説、4. 文法規則の適用例の提示と説明、という 4 部分からなる。本訳注は、これまで閉ざされてきたパーニニ文法の世界への入り口となり、またパーニニ文法を適切に扱うための便利な工具となることが期待される。

2. 先行研究と本研究の位置づけ

パーニニ文典全体の訳注は欧米の言語では多く出版されている。代表的なものを年代順に並べると、ベートリンクによる独語訳注（Böhtlingk 1887）、ヴァスによる英語訳注（Vasu 1891）、ルヌーによる仏語訳注（Renou 1948–1954）、カトレーによる英語訳注（Katre 1987）、シャルマによる英語訳注（Sharma 1990–2003）となると思われる。これらのうちヴァスとシャルマによるものは解説部分が豊富である。訳注ではないが、パーニニ文法全体の枠組みを説明するものとしてカルドナによる大著を挙げないわけにはいかない（Cardona 1997）。パーニニ文法学文献に現れる様々な専門用語を簡潔に説明する辞典類も欧米の言語では少なくない（たとえば Renou 1942, Chatterji 1948, Abhyankar and Shukla 1977, Roodbergen 2008）。

翻って、日本ではまずこのような辞書類は存在しない。パーニニ文法に対する解説を企図したものとして代表的なものには辻によるもの（辻 1974）、後藤によるもの（後藤 1990）、熊本によるもの（熊本 1996）があり、このうち最も詳細かつ広範囲に及ぶのは熊本のものであるが、それとて—この点はカルドナの大著も同じであるが—パーニニ文法のすべてを網羅するものではない[2]。パーニニ文典全体を見渡せる訳注としては吉町によるもの（吉町 1990）がある。ただし、そこで使用される訳語は難解であり、文法規則の内容や例に対する説明は基本的になされないため、この訳注だけを通じてパーニニ文典の内実を理解するのは極めて困難である。

本研究の第一の目的は、上述した諸先行研究を積極的に利用しつつ、パーニニ文典そのものの姿とその意図される内容のすべてを明瞭に伝えることができる日本語訳注を完成させることにある。そのため、パーニニの文法規則を訳する際には可能な限りパーニニの語法や意図から

[2] 川村（2021）では熊本（1996）に対する若干の覚書を記している。なお川村（2021: 61, note 19）では、『言語学大辞典』の中「インドの言語学」という表題と併記される英語表題は Linguistics in Ancient India となっている点を指摘し、その英語表題に「古代インドにおける言語学」という訳を与えた。この注記によって意図していたのは、日本語表題では「インド」となっている部分が英語表題では「古代インド」（Ancient India）となっている点を指摘することであって、in という前置詞を「の」ではなく「における」という日本語で訳すべきであるということではない。Linguistics in Ancient India の訳語としては「古代インドの言語学」でも問題はないであろう。

外れないような訳を平易な言葉で提示している。次に、規則の内容や規則の適用例を同じく平易な言葉で明確に説明する箇所を設けている。そうすることで、パーニニの文法規則の実際のあり様とその具体的な中身を本邦の学界に伝えることができると考える。このようにして完成されていく訳注は、パーニニ文法の仕組みや用語の解説を兼ねるものであり、本邦において研究の場でも教育の場でも広く使いやすいものとなるはずである。

専門家たちの世界に閉じ込められているパーニニ文法を解放し、その死蔵を廃してそれを万人の共有財産とすること、これが本研究を開始した動機である。

3. パーニニ文法の構成

訳注を提示する前に、それを理解するための前提として、パーニニ文法の構成を以下に説明しておく。この箇所は主に川村（2022: 30–36）に依拠するものである。ただし、所々に加筆や修正を施している。本稿の売りはパーニニ文典の訳注を提供することであるから、パーニニ文法の構成を説明する当該部分に既公表の内容が含まれていても、本稿の学術的な価値は損なわれないと考える。なお、川村（2022: 26–30）ではパーニニという人物およびパーニニ文法の内容と方法について概説を与えているので、必要に応じて参照していただきたい。

3.1. 『音素表』

パーニニ文典は以下に提示する音素表を前提としている。「音の一覧」（akṣarasamāmnāya）、「短縮記号の短句」（pratyāhārasūtra）、「神の短句」（devasūtra）、「シヴァの短句」（śivasūtra）と様々に呼称される。「シヴァ」という神の名前が現れるのは、表を構成する音がすべてシヴァから授けられたものであるという伝説があるからである[3]。この音素表の形はパーニニ自身が構成したものであるとする立場が学界では普通であるが[4]、音素を一定の順序で並べた表のようなものはパーニニ以前から存在していた可能性がある[5]。

---

[3] 文法家ハラダッタ（Haradatta, 12 世紀）は次のような詩を引いている。PM I.9: yenākṣarasamāmnāyam | adhigamya maheśvarāt | kṛtsnaṃ vyākaraṇaṃ proktaṃ | tasmai pāṇinaye namaḥ | 「大主宰神（シヴァ）から音素表を証得して文法学全体を公布したパーニニに敬礼。」

[4] Cardona (1976: 160–161).

[5] ティーメは、『アタルヴァ・ヴェーダ』（*Atharvaveda*）や『マイトラーヤニー・サンヒター』（*Maitrāyaṇī-Saṃhitā*）に現れるある詩節が音素を並べた表に言及するものであることを論じている（Thieme 1985）。仮にティーメの論が正しいとすれば、すでにその時代にある種の音素表が存在していたことになる。その時代に知られていたと考えられる音素表の形としてティーメが提示するものを参考までに挙げておく（Thieme 1985: 559）。

a i u ṛ e o ai au
y r l v
k c ṭ t p
ś ṣ s h

(1) a i u Ṇ
(2) ṛ ḷ K
(3) e o Ṅ
(4) ai au C
(5) ha ya va ra Ṭ
(6) lÃ Ṇ
(7) ña ma ṅa ṇa na M
(8) jha bha Ñ
(9) gha ḍha dha Ṣ
(10) ja ba ga ḍa da Ś
(11) kha pha cha ṭha tha ca ṭa ta V
(12) ka pa Y
(13) śa ṣa sa R
(14) ha L

このような音素表を設ける理由は、これによって複数の音、特に自然類（natural class）を一括して提示する短縮記号（pratyāhāra）をつくり、この短縮記号を使うことで文法規則を簡略にして、文法規則による言葉の派生説明を簡略にするためである[6]。

音素群（1）–（14）それぞれの最終位置にある子音は it と呼ばれる指標辞（anubandha）である（規則 1.3.3）[7]。これらの指標辞を使って、たとえば aC（［1］a から［4］C までの音、つまりすべての母音）、haL（［5］h から［14］L までの音、つまりすべての子音）、aL（［1］a から［14］ L までの音、つまりすべての音）といったように、複数の音を指示する短縮記号が形成されるのである（規則 1.1.71）。(5) 以降に子音が配置されているが、それら子音に付されている a 音は、子音の発声を容易にするため、あるいは子音の発声を可能とするために付されているものであり[8]、現代の用語で母音挿入（anaptyxis）と言われる現象である。この発声用の母音がなければ、たとえば (5) の音素群を読みあげるとき、hyvr という子音連続を読み上げなけれ

[6] KV I.2: atha kimartho varṇānām upadeśaḥ | pratyāhārārthaḥ | pratyāhāro lāghavena śāstrapravṛttyarthaḥ ‖「【問】何のために諸音素を教示するのか。【答】短縮記号のためである。短縮記号は容易に文法学の活動を行うためのものである。」

[7] パーニニ文法で用いられる指標辞がそれぞれどのような機能を担っているのかを知るには Devasthali (1967) や Katre (1981) が便利である。

[8] 文法家たちは、(6) の l 音に付されている a 音は発声用の母音 a ではなく指標辞としての鼻母音 Ã（規則 1.3.2）と見なしている（Cardona 1969: 12, note 31）。その目的は、規則 1.1.51: ur aṇ raparaḥ の raparaḥ における ra を、「r 音」を意味する ra ではなく、r 音と l 音を指示する rÃ とする点にある。ṛ 音と ḷ 音は同類音と見なされるから（vt. 5 on A 1.1.9: ṛkāraḷkārayoḥ savarṇavidhiḥ）、規則中の ur という ṛ の属格形によって ṛ 音と同類音である ḷ 音も指示される。以上により、たとえば母音 ṛ に a が代置されるときには a に r が後続し、母音 ḷ に a が代置されるときには a に l が後続するという規定内容が得られる（KV on śivasūtra 6 [I.4]: lakāre tv anunāsikaḥ pratijñāyate | tena ur aṇ rapara ity atra ra iti pratyāhāragrahaṇāl laparatvam api bhavati）。

ばならないが、そのままでは発声が困難である。あるいは、そもそも単独の子音それ自体、母音を後続させずには発声できないと考えられている[9]。

（1）–（4）に挙げられる母音（aC）は、その同類音（savarṇa）も指示する（規則 1.1.69）。同類音とは、同じ調音位置と口腔内の同じ調音動作をもって発せられる音である（規則 1.1.9）[10]。それぞれの母音には短母音（hrasva、1 モーラ）、長母音（dīrgha、2 モーラ）、延伸母音（pluta、3 モーラ）の区別、非鼻母音・口母音（ananunāsika）と鼻母音（anunāsika）の区別、高アクセント母音（udātta）、曲アクセント母音（svarita）、低アクセント母音（anudātta）の区別がある。これらはすべて同じ調音位置と同じ調音動作によって発声される音であるので、同類音と見なされる。したがって、たとえば音素表冒頭の a は、3（短母音、長母音、延伸母音）× 2（非鼻母音、鼻母音）× 3（高アクセント母音、曲アクセント母音、低アクセント母音）で計 18 種の音を指示することができる。母音 ḷ には長母音がないので、それが指示する母音の種類は 12 種となる[11]。複母音（sandhyakṣara）である e（a＋i）、ai（a＋e）、o（a＋u）、au（a＋o）には短母音がないため、それらが指示する母音の種類も同じく 12 種となる。

音素表の音群に加え、パーニニは動詞語基（dhātu）、接辞（pratyaya）、加音（āgama）にも指標辞を付すことによって、単語の派生手続き上でそれらが有する性質や機能を指定している（規則 1.3.2–1.3.8）。指標辞はそれらが具体的な派生手続きに入った段階でゼロ化されて音素としては存在しないものと見なされる（規則 1.3.9）。本研究では、指標辞は大文字で示し、発音の便宜上子音に付随している母音には下線を引く。

---

[9] SK I.4: iti māheśvarāṇi sūtrāṇy aṇādisañjñārthāni | eṣām antyā itaḥ | laṇsūtre ’kāraś ca | hakārādiṣv akāra uccāraṇārthaḥ ‖「以上が大主宰神からもたらされた諸々の短句であり、aṆ などの術語をつくるためのものである。これら（短句）の最終音は指標辞である。lÃṆ という短句の箇所では Ã 音も〔指標辞である〕。h 音などにおける a 音は発声用のものである。」

BM I.5: hakārādīnāṃ sukhoccāraṇārthaṃ punaḥ punar akārapāṭha ity arthaḥ | anyathā hyvr ity evaṃ kliṣṭoccāraṇāpatter iti bhāvaḥ | athavā acaṃ vinā halām uccāraṇābhāvāt punaḥ punar akārapāṭho hakārādyuccāraṇārtha ity eva vyākhyeyam | ata evoccair udāttaḥ iti sūtre bhāṣyam—nāntareṇācaṃ vyañjanasyoccāraṇaṃ bhavati iti | atra ca idam eva akārasya punaḥ punar uccāraṇaṃ jñāpakam |「h 音などを楽に発声するため繰り返し a 音が読まれている。このような意味である。さもなくば、hyvr というこのような場合に発声が困難となる、ということが意図されている。あるいは、母音なしでは子音は発声されないから、h 音などを発声できるよう繰り返し a 音が読まれている、とのみ説明されるべきである。まさにこれゆえ、uccair udāttaḥ（規則 1.2.29）という文法規則に対して『大注釈』は『母音がなくては子音は発声されない』と述べている。そして、まさにこの、a 音が繰り返し発声されていることが、このこと（母音なしでは子音は発声されないこと）に対する指標である。」

[10] 規則 1.1.9: tulyāsyaprayatnaṃ savarṇam ‖ 音が発声される場所である調音位置には、軟口蓋（kaṇṭha「喉」）、硬口蓋（tālu）、口腔内の最上点（mūrdhan）、歯（danta）、唇（oṣṭha）の 5 つがある。規則中で言われる調音動作（prayatna「労力」）とは、調音器官（舌とこれら 5 つの調音者 [articulator] ）が行う動作のことである。2 つ以上の音がこのような調音位置と調音動作を同じくしているとき、それらの音は同類音と呼ばれる。ここで言われる調音動作は口腔内で行われるものが意図されており、口腔外の動作は意図されていない。したがって、口腔外の調音動作によって生み出される有声音と無声音の区別や有気音と無気音の区別は、特定の 2 つの音が同類音と見なされることを妨げない。たとえば、k 音は無声音、g 音は有声音であるが、両者は同じ調音位置（喉）と口腔内の同じ調音動作（完全閉鎖）を有する点で同類音と理解される。k 音という無気音と kh 音という有気音の場合も同様である。

[11] ṛ 音と ḷ 音を同類音と見なす立場では（vt. 5 on A 1.1.9）、ṛ 音と ḷ 音はそれぞれ 30 種の母音（18 種の ṛ 音と 12 種の ḷ 音）を指示することになる。

3.2. 『規則集』／『八課集』

パーニニの文法規則はスートラ（sūtra）と呼ばれ、そのような文法規則が一定の順序で配列された『規則集』(sūtrapāṭha) がパーニニ文法の基幹となる。『規則集』を構成するスートラは、通常、短く簡潔な式のようなあり方をした短句であるが、項目を列挙するために長くなっているものも存在する（たとえば規則 3.2.21 や規則 4.1.2)。『規則集』は、8 つの課から構成されていることから、『八課集』または『八集』(*Aṣṭaka*) と呼ばれる。8 つの課はそれぞれ 4 つの節に区切られ、これらそれぞれの四半分（pāda）が一定数の文法規則によって構成される。このような仕方で、『八課集』には約 4000 の文法規則が配列されている。

パーニニの文法規則は、言葉遣いの点でも内容の点でも一切の無駄を排して極度に圧縮されたものであり[12]、そのような規則が次々に淡々と提示されていく。このような文法規則からなる『八課集』は、ただ通読しただけでは何がなんだがわからない代物であり、その内容を真に理解するには先達による解説や先達が著した解説書が必要である。パーニニの文法規則を正しく理解するためにはある種の解説が必要であることは、すでにパタンジャリ（Patañjali, 紀元前 2 世紀）が述べていることである[13]。パーニニ文典について論ずる現存最古の作品として、カーティヤーヤナ（Kātyāyana, 紀元前 3 世紀頃）の『評釈』（vārttika）とパタンジャリの『大注釈』（*Mahābhāṣya*）がある。『評釈』は約 4000 あるパーニニの文法規則うち、1200 を超える規則に対して、語句の追加、削除、変更さらには新規規則の追加を簡潔な言い回しで提案している。一方、『大注釈』はパーニニの文法規則および『評釈』に対して、高度な文法学的議論を様々な方向に展開している。また、パーニニ文典の全規則を 1 つ 1 つ解説していく注解書として最もよく使われているのは、ジャヤーディティヤ（Jayāditya）とヴァーマナ（Vāmana）によって 7 世紀頃に著された『カーシカー注解』(*Kāśikāvṛtti*) である。

言葉遣いと内容を極度に圧縮して完成されたパーニニの文法規則（sūtra）の性格は、伝統的な詩によって次のように歌われている。

---

[12] 文法家ナーゲーシャ（Nāgeśa, 17 世紀から 18 世紀）が挙げる 1 つの解釈規則によれば、文法家は文法規則を 1 子音分の音量でも縮めることができれば、それを息子の誕生と同じくらい喜ぶそうである。PLŚ 122: ardhamātrālāghavena putrotsavaṃ manyante vaiyākaraṇāḥ ||「半モーラ（1 子音分の音量）を縮めることができれば、文法家たちは〔それを〕息子〔が生まれた時と同じ〕喜びと考える。」

[13] MBh on vt. 14 (Paspaśā) [I.12.23–26]: na hi sūtrata eva śabdān pratipadyante | kiṃ tarhi | vyākhyānataś ceti | parihṛtam etat | tad eva sūtraṃ vigṛhītaṃ vyākhyānaṃ bhavatīti | nanu coktaṃ na kevalāni carcāpadāni vyākhyānaṃ vṛddhiḥ āt aij iti | kiṃ tarhi | udāharaṇaṃ pratyudāharaṇaṃ vākyādhyāhāra ity etat samuditaṃ vyākhyānaṃ bhavatīti |「実に文法規則だけを通じて〔人が〕諸々の言葉を理解することはない。【問】そうであれば、どう〔理解するの〕か。【答】さらに解説が加わることで〔言葉は理解される〕。【反論】それは退けられる。文法規則それ自体が、分析されたときに解説となる。【反論】しかし、〔例えば規則 1.1.1 における〕“vṛddhiḥ”, “āt”, “aic” のように、単に繰り返される諸語は解説ではないと述べられている。【問】その場合、〔解説とは〕何なのか。【答】例、反例、文補足というこれらを兼ね備えたものが解説となる。」

MBh (Paspaśā) [I.6.26]: vyākhyānato viśeṣapratipattir na hi saṃdehād alakṣaṇam |「解説を通じて〔文法規則の〕明確な理解が得られる。というのは、文法規則は〔一見〕不明確〔に見える〕からといって正しくないことにはならないからである。」

> 文法規則とは、少ない音節からなり、疑惑を生み出さず、精髄を備え、すべての方向に顔を向け、余分なものがなく、非の打ち所がないものであると、文法規則に通ずる者らは知っている[14]。

パタンジャリは、パーニニが文法規則を定式化した様とそこから帰結することを次のように語る。

> 権威に達した師（パーニニ）は、ダルバ草という浄化具を手に持ち、清浄な空き地に東を向いて座し、多大な労力をもって、文法規則をもたらしたものだった。そうであれば、〔パーニニ文典において〕一音素たりとも無意味であることはあり得ない[15]。

文法家たちがパーニニの文法規則を議論する際には、ここで述べられている「パーニニは一音素たりとも無意味な音を使っているはずがない」という発想が働く。パーニニが残した 1 つ 1 つの金句には一切の無駄がないため、何か余計に見えるものがあると、そこには何らかの意図が隠されているに違いないと文法家たちは考え、何らかの示唆される内容を見てとるのである。パーニニ文典において何らかの内容を示唆していると捉えられた言葉は「知らしめるもの、示唆者」（jñāpaka）、その言葉によって示唆される内容は「知らしめられるべきもの、示唆対象」（jñāpya）と言われる。

3.3. 『動詞語基表』

『動詞語基表』（*Dhātupāṭha*）は、動詞形派生や特定の名詞形派生の出発点となる動詞語基を、現在語幹形成法にしたがって 10 種に分類して配置したものである。全部で 2000 近くの動詞語基が挙げられている[16]。『規則集』には、この『動詞語基表』に現れる動詞語基を前提とした文法規則が設けられている（すべての規則がそうであるわけではない）。『動詞語基表』に挙がる動詞語基はアクセントや指標辞の有無によって特徴づけられており、それらによって、単語の派生手続きの中で当該の動詞語基がどの文法規則の適用を受けるのか、または受けないのかがすべての動詞語基に渡って分かるようになっている。このようなアクセントや、動詞語基に付された母音が指標辞であることを示す鼻母音化は伝承の過程で失われたが、現在はアクセントや鼻母音が理論の上から復元されている。

『動詞語基表』の中身は後代による付加をともなっており、後代に付加された文法規則

---

[14] ŚKD V.394: alpākṣaram asandigdhaṃ | sāravad viśvatomukham | astobham anavadyaṃ ca | sūtraṃ sūtravido viduḥ ‖ この定義は、パーニニの文法規則に限らず、何であれスートラと言われるものの性格を説明する際に利用される。

[15] MBh on vt. 7 to A 1.1.1 (I.39.10–12): pramāṇabhūta ācāryo darbhapavitrapāṇiḥ śucāv avakāśe prāṅmukha upaviśya mahatā yatnena sūtraṃ praṇayati sma tatrāśakyaṃ varṇenāpy anarthakena bhavitum….

[16]『動詞語基表』の作者問題については Cardona (1976: 163–164) を参照せよ。

（sūtragaṇa）もそこには入り込んでいる[17]。また、本来『動詞語基表』には動詞語基のみが挙げられていたが、後代にはそれぞれの動詞語基が持つ意味を説明する所格形の単語が挿入されるに至る[18]。たとえば、『動詞語基表』の冒頭には動詞語基 bhū「なる、生ずる、存在する」が挙がるが、本来は bhū́ とのみ提示されていたはずである。後代にはここに意味を説明する単語が追加されて、現在は bhū́ sattāyām「bhū は存在を意味する」という形で伝承されている[19]。パーニニが知っていた当時の『動詞語基表』そのままの形は伝わっていない。現在利用される『動詞語基表』の形は、後代の文法家たちが注釈を施して伝えた『動詞語基表』のそれである。『動詞語基表』に注釈を施す作品として現存しているのは、マイトレーヤラクシタ（Maitreyarakṣita, 11 世紀）の『動詞語基の灯火』（*Dhātupradīpa*）、クシーラスヴァーミン（Kṣīrasvāmin, 11 世紀）の『乳河論』（*Kṣīrataraṅgiṇī*）、サーヤナ（Sāyaṇa, 13 世紀から 14 世紀）の『マーダヴァの動詞語基注解』（*Mādhavīyadhātuvṛtti*）の 3 つである。

3.4. 『名詞語基表』

『名詞語基表』（*Gaṇapāṭha*）は名詞類を 261 の群に振り分けて記載している文献である。パーニニは文法規則の中でこの『名詞語基表』の語群に言及して、当該の文法規則が規定する操作が適用される名詞類を指定している。このように、『規則集』は『動詞語基表』と同様に『名詞語基表』も前提としている。『名詞語基表』はパーニニ自身に帰せられ得るが、パーニニ以前にもすでに類似の語群表が構成されていたようである[20]。

『動詞語基表』と同じく、『名詞語基表』の中身も後代による増補を伴うが、この傾向は『動詞語基表』よりも著しい。我々が現在手にして利用することができるのは、これも『動詞語基表』と同じく、すでに何らかの増補を経た形の『名詞語基表』であり、パーニニ自身が見ていた『名詞語基表』の姿は不明である。パーニニ文法学文献の中で、パーニニが言及する語群の中身を伝える最古の文献は上述の『カーシカー注解』である。文法家ハラダッタ（Haradatta, 12 世紀）によれば、彼の時代には、この『カーシカー注解』以外にパーニニが文法規則の中で言及する名詞群の中身を提示する作品は存在していなかったらしい[21]。

『名詞語基表』に挙げられている語群には、網羅的語群（paripūrṇagaṇa）と例示的語群（ākṛtigaṇa）の 2 種がある。網羅的語群は、その語群を構成する名詞類が余すところなく列挙されている語群であり、例示的語群は、その語群に属すべき名詞類のうちの代表例だけが列挙されている語群である[22]。語群に特定の単語が列挙されていなくても、その語群が例示的語群であれば、当該

---

[17] Cardona (1976: 161).

[18] このような意味記載（arthapāṭha）が後になされたものであることは、Cardona (1984) によって説得的に示された。

[19] 文法家バットージ・デークシタ（Bhaṭṭoji Dīkṣita, 16 世紀から 17 世紀）が伝えるところによると、『動詞語基表』に列挙される各動詞語基に意味記載を与えた人物の 1 人は、ビーマセーナ（Bhīmasena）という名の人物である（Ogawa 2005: 96–97）。

[20] Cardona (1976: 165).

[21] PM I.5: vṛttyantareṣu tu gaṇapāṭha eva nāsti.

[22] PM on KV to A 2.1.59 (II.80): prayogadarśanenākṛtigrāhyo gaṇaḥ ākṛtigaṇaḥ |「言語運用の観察に基づき、見本に従

の単語をその語群に属するものと見なすことができ、文法規則の適用対象とすることができる。このことから分かるように、例示的語群という概念は、難語の正当化（文法規則により派生説明を与えること）にとって非常に便利な装置である。その証拠に、時代が下れば下るほど、例示的語群と見なされる語群は増える傾向にある。

3.5. 『ウナーディ規則』

『ウナーディ規則』（uṇādisūtra）は、主にパーニニ文典が直接的には規定していない接辞による名詞造語法を定めた規則集である。特徴としては、そのような名詞類をすべて動詞語基から派生させる点にあり、動詞語基の後に多種多様な接辞の導入を規定している。『ウナーディ規則』には 5 章からなるもの（pañcapādī）と 10 章からなるもの（daśapādī）の 2 つが現在伝わっているが、後者は、前者を利用しながら構成された後代のものである[23]。

『ウナーディ規則』の作者や年代ははっきりしない。1 つ確かなことは、パーニニもまたこの『ウナーディ規則』で規定される類いの接辞を知っており、それを通じた単語の派生説明を自身の体系の中で受け入れているということである[24]。

『ウナーディ規則』の作者は、伝統的にはシャーカターヤナ（Śākaṭāyana, 年代不明）と考えられている。このシャーカターヤナは、パーニニが自らの文典の中で文法学の先人の 1 人として言及する人物であり（規則 3.4.111，8.3.18，8.4.50）、パタンジャリは名詞類の動詞起源説を唱えた文法学者としてこのシャーカターヤナに論及している[25]。

4. 訳注の方針

本研究で提示されるパーニニ文典の訳注は本稿冒頭部で述べた4つの部分からなる。それぞれの箇所で採用している記述の方針を以下に説明する。

って理解されるべき語群が例示的語群である。」

[23] Cardona (1976: 170–171).

[24] パーニニが『ウナーディ規則』が規定する接辞に言及している規則としては規則 3.3.1 や規則 3.4.75 がある。

[25] MBh on vt. 1 to A 3.3.1 (II.138.14–17): nāma ca dhātujam āha nirukte | nāma khalv api dhātujam | evam āhur nairuktāḥ || vyākaraṇe śakaṭasya ca tokam | vaiyākaraṇānāṃ ca śākaṭāyana āha dhātujaṃ nāmeti ||「そして〔ヤースカは〕『語源学』において『名詞類は動詞語基から生まれる』と言っている。周知のように名詞類は動詞語基から生まれる。このように語源学者らは言っている。そして文法学においては、シャカタの子孫が〔そのように主張している〕。つまり文法家たちのうちでは、シャーカターヤナが『名詞類は動詞語基から生まれる』と言っている。」

Uddyota III.311: nanu teṣām evaṃ vyutpādanaṃ kair vaiyākaraṇaiḥ kṛtam ity āśaṅkyāha bhāṣye—nāma cetyādi | tad vyācaṣṭe—nāma khalv apīti | nāma dhātujam ity evam āhur nairuktā ity akṣarārthaḥ | tad āha—anyair ityādinā | pāṇines tu tāni avyutpannāny evety bhāvaḥ | idañ ca āyaneyīnīti sūtre bhāṣye spaṣṭam | evañ ca kṛvāpety uṇādisūtrāṇi śākaṭāyanasyeti* sūcitam ||「【反論】〔確かに〕彼らはこのように派生説明をなしている。〔しかし〕一体どの文法家たちが〔そのような派生説明を〕なしているのか。【答論】このような反論を懸念した上で、『大注釈』では nāma ca 云々と述べられている。その〔一節をパタンジャリは〕nāma khalv api 云々と説明する。語源学者らは『名詞類は動詞語基から生じる』とこのように述べている。これが文字通りの意味である。そのことを、anyair 云々を通じて〔カイヤタは〕説明している。一方、パーニニにとっては、それら〔uṆ などの接辞で終わる項目〕は非派生項目に他ならない、ということが意図されている。そしてこのことは āyaneyīnī 云々という文法規則（7.1.2）に対する『大注釈』において明らかである。そしてこのような場合、kṛvāpā 云々（US 1.1）〔で始まる〕ウナーディ規則群はシャーカターヤナのものであることが示唆される。」*テクストの śāṭakāyanasyeti を修正する。

4.1. 語釈

パーニニ文典の原文を提示した上で、文法規則中で使用される語の語幹、格、数を示す。その語が不変化詞である場合にはその限りではない。当該の語が複合語である場合には、適宜、複合語を構成する語をハイフンで繋ぐ。語釈中でも指標辞は大文字で表す。

語釈中で使用する略号は以下の通りである。

ABL = ablative（奪格）
DU = dual（双数）
GEN = genitive（属格）
INS = instrumental（具格）
LOC = locative（所格）
NOM = nominative（主格）
PL = plural（複数）
SG = singular（単数）

4.2. 規則訳

規則の訳は、パーニニが本来意図したであろうことを十分に考慮した上で、原則として『カーシカー注解』の解釈に従ったものを提示している。パーニニ文典の縮約性を重んじながらも日本語として意味をなすように、かつ規則の要点を分かりやすく示すことができるように、純粋な逐語訳を与えることはせず状況に応じて補足をしながら訳を与える。その際、原文の内容理解を促すための補足説明は（）に入れ、翻訳の一部として補う内容は〔〕に入れる。原文に対する訳として許容される範囲に属するものは〔〕に入れない。これらの方針は略説と例の箇所でも同じである。

パーニニ文典では、前の規則で与えられた項目が後の規則に次々と継起（anuvṛtti）していく。その際、当該の項目は後続する規則において直接的に述べられることはないが、前の規則から継起するものとして後続規則の一部をなすものである。このような項目は支配項目（adhikāra）と呼ばれる。ある規則で支配項目を提示し、それを後続する規則に読み込ませていくという形をとることによって、同じ項目を何度も繰り返し述べる労力を省いているのである[26]。他の規則から継起するこのような項目に対する訳は〔〕に入れない。

パーニニ文典で使用される術語（sañjñā）に対する訳には〈〉を使用し、〈〉の中には原語とそれに対する訳を与える。術語を日本語に訳すことが難しい場合には、原語のカタカナ表記を与える。これは略説と例の箇所でも同様である。

aC や iK など一群の母音を指示する短縮記号が規則で与えられるとき、理解を容易にすべく（）内にその短縮記号が指示する音を示す。しかしその場合、すべての音を挙げることはせ

[26] パーニニ文典における継起（anuvṛtti）を扱う代表的な研究として Joshi and Bhate (1984) がある。

ず、原則として短母音と長母音のみを挙げる。これは略説と例の箇所でも同じである。

4.3. 規則内容の略説

規則が規定する内容の要点を説明する。パーニニ文典の規則への言及は、たとえば1.1.1のように、数字のみを使って行う。訳注の最初にパーニニ文典の原文を提示する際にも、同じ方針をとる。それ以外の場合には略号A（= *Aṣṭādhyāyī*）を入れる。以上については例の箇所でも同様である。

4.4. 規則適用例の提示と説明

文法規則の適用例は『カーシカー注解』からとる。その際、文法規則の規定内容の1つ1つに対し、原則として1つの例を挙げる。『カーシカー注解』が1つの規定内容に対して2つ以上の例を挙げている場合、そのすべてを説明することはしない。

『カーシカー注解』で挙げられる例には、それがヴェーダ文献からの引用でない場合にはアクセントが付されていない。本研究で例を提示する際にも、その例がヴェーダ文献に確認される語形であったとしても、『カーシカー注解』がアクセントなしで挙げる場合にはアクセントを付さない。一方、『カーシカー注解』で挙げられる例には、それがヴェーダ文献からの引用である場合、アクンセトが付されている。そのような例を本研究で使用する際には、それにアクセントを付す。説明の対象となるパーニニの文法規則がアクセントについて規定をなすものである場合には、例は常にアクセント付きで提示する。なお、星印「*」が例として提示される語形に付されている場合、それは、当該の語形が誤った手続きによって得られてしまう正しくないものであることを示す。

語形を繋ぐ「〜」はそれらの語形が任意に派生可能なものであることを示している。また、主語が明示されていない例に対しては、主体を表す語として便宜的に「彼」を補う。ただし、例として提示される語形が形容詞の女性形や中性形である場合はこの限りではない。

5. 規則 1.1.1-1.1.75 の訳注

【規則】

1.1.1 vṛddhir ādaic ||

/vṛddhi.NOM.SG āT-aiC.NOM.SG/

「母音 ā, ai, au は〈vṛddhi ヴリッディ〉と呼ばれる。」

【略説】

ここで〈vṛddhi ヴリッディ〉（「増長、増長音」）という術語（sañjñā）が定義されている。この規則によって、パーニニ文典の中で〈vṛddhi ヴリッディ〉は母音 ā（āT）、ai, au（aiC）を指すことが取り決められる。

vṛddhi という語の一般的な意味は「成長、繁栄」だが、文法用語として「母音の延長階梯（ā,

ai, au）」を意味する。パーニニ文典における文法規則中の一般的な語順としては、術語を示す語は術語を付される要素（sañjñin）を示す語の後に来るが、当該規則においては術語を示す語 vṛddhi が最初に置かれている。パタンジャリによると、これは vṛddhi という語がもつ吉祥なる意味によるという（MBh on vt. 7 to A 1.1.1 [I.40.5–9]）。

āT の T は、それが付された音だけを指示するための記号である（1.1.70）。つまり āT は長音 ā のみを指示する。aiC は音素表の ai から、C という指標辞（it, anubandha）が現れるまでの母音（ai, au）を指示する短縮記号（pratyāhāra）である（1.1.71）。

【例】

次の「誰々の子孫」を表す語（父称 patronymic）の初頭母音には、接辞の導入を契機としてヴリッディが代置されている：āśvalāyanaḥ「アシュヴァラの孫以降の子孫」（4.1.99, 7.2.118）、aitikāyanaḥ「イティカの孫以降の子孫」、aupagavaḥ「ウパグの子以降の子孫」（4.1.92, 7.2.117）。

【規則】

1.1.2 adeṅ guṇaḥ ‖

/aT-eṄ.NOM.SG guṇa.NOM.SG/

「母音 a, e, o は〈guṇa グナ〉と呼ばれる。」

【略説】

〈guṇa グナ〉（「従属音」）という術語が定義される[27]。この規則によりパーニニ文法において〈guṇa グナ〉は母音 a, e, o を指示することになる。

aT の T は、それが付された音だけを指示するための記号である（1.1.70）。つまり aT は短音 a だけを指示する。eṄ は音素表の e から Ṅ という指標辞が現れるまでの母音（e, o）を指示する短縮記号である（1.1.71）。

【例】

次の複合未来形（いずれも 3 人称単数）における語根の母音にはグナが代置されている：taritā「彼は渡るであろう」（7.3.84）、cetā「彼は集めるであろう」、stotā「彼は称賛するであろう」。

【規則】

1.1.3 iko guṇavṛddhī ‖

/iK.GEN.SG guṇa-vṛddhi.NOM.DU/

「iK（i, u, ṛ, ḷ）にグナおよびヴリッディが代置される。」

---

[27] グナ（guṇa）は「二次的な特徴・性質〔を有する母音〕」を意味すると思われる（Renou 1942: 138: “qualité secondaire”; Whitney 1889: §235a: “secondary quality”）。次の 1.1.3 に規定されるように、グナ母音 e, o, a は i, u, ṛ, ḷ に代置されるものである。つまり、i が e に、u が o に、そして ṛ, ḷ が a に置き換えられる。このとき、たとえば i と e を比較した場合、e は長さだけでなく音色が i と異なっている。文法家たちはこのような音色の違いに着目して、これらの母音を「〔元の母音とは異なる、〕二次的な性質〔を帯びた母音〕」と名付けた可能性がある（泉井 1976: 311–312）。これらの点を考慮して本訳注では「従属音」と訳す。

【略説】

〈guṇa グナ〉と〈vṛddhi ヴリッディ〉によって指示される音素が何かに取って代わる操作がパーニニ文典内で規定される場合、その取って代わる操作の対象は iK であることを規定している。iK は音素表の i から K の指標辞が現れるまでの母音（i, u, ṛ, ḷ）を指示する短縮記号である。

A が B に取って代わることは、B の代わりに A が置かれることを意味する。このような操作はパーニニ文法学では「代置」（ādeśa）と呼ばれる。B の音が A の音へ「変化する」ことを述べる音韻学書（prātiśākhya）の諸規定とは違い、パーニニ文法では B の音が A の音によって「代置」されると考える。

【例】

次の第 1 類現在形（いずれも 3 人称単数）における語根の母音には iK の代わりにグナが置かれている：tṝ「渡る」→ tarati「彼は渡る」（7.3.84）、nī「導く」→ nayati「彼は導く」、bhū「なる、生ずる」→ bhavati「彼は〔何かに〕なる」。次のアオリスト（いずれも 3 人称単数）における語根の母音には iK の代わりにヴリッディが置かれている：kṛ「する」→ akārṣīt「彼はなした」（7.2.1）、ci「集める」→ acaiṣīt「彼は集めた」、lū「刈る」→ alāvīt「彼は刈った」。

【規則】

1.1.4 na dhātulopa ārdhadhātuke ||

/na dhātu-lopa.LOC.SG ārdhadhātuka.LOC.SG/

「動詞語基の一部のゼロ化を引き起こすアールダダートゥカ接辞が後続する場合、グナおよびヴリッディの代置は行われない。」

【略説】

1.1.3 で述べられた iK への代置操作が行われない場合を規定している。動詞語基（dhātu）は 1.3.1 及び 3.1.32 で定義される文法用語、アールダダートゥカ（ārdhadhātuka「半動詞語基接辞」）は 3.4.114–117 で定義される文法用語である。このように、パーニニ文典では後の規則で規定される事柄を前提とした言葉遣いがなされることが少なくない。つまりパーニニ文典は冒頭から順番に読んでいく類のものではない。

パーニニ文典における「ゼロ」については 1.1.60 で規定される。ārdhadhātuke という所格形における所格語尾が「〜の前で」を、すなわち「〜が後続する場合」を意味することについては 1.1.66 で規定される。

【例】

loluvaḥ「（強く／繰り返し）刈る者」。この語形は、強意活用形成接辞 yaṄ（3.1.22）が導入された強意形動詞語基 lolūya-「（強く／繰り返し）刈る」から派生されるが、行為者を表すアールダダートゥカ接辞 aC（3.1.134）を lolūya- に付与するとき、この接辞は動詞語基の一部である接辞 yaṄ のゼロ化を引き起こす（2.4.74）、つまり lolū-yaṄ-aC > lolū-Ø-aC となる。この場合、1.1.4 によって通常のグナの代置（*lolavaḥ）は行われず、正しい語形 loluvaḥ が導かれる。

【規則】

1.1.5 kṅiti ca ||

/K-Ṅ-it.LOC.SG ca/

「指標辞 K または Ṅ を有する接辞が後続する場合にも、グナおよびヴリッディの代置は行われない。」

【略説】

1.1.3 で述べられた iK への代置操作が行われない場合を規定している。ここで言われる「指標辞 K または Ṅ」とは、音素表の中に配置された指標辞ではなく、パーニニの文法規則が規定する接辞に付された指標辞のことである。kṅit という複合語はバフブリーヒ（bahuvrīhi「多米複合語、所有複合語」）であり、「K と Ṅ を指標辞（it）とするもの（接辞）」を意味する。kṅiti という所格形が「〜の前で」を、すなわち「〜が後続する場合」を意味することについては 1.1.66 で規定される。

『カーシカー注解』は規則中の kṅiti という表現によって g も意図されていると見なしている（KV on A 1.1.5 [I.7]）。g- が付与された gkṅiti が連声で kkṅiti となり（8.4.55）、k 音が 1 つ脱落した結果が kṅiti であると考えていると思われる。実際、パタンジャリは、当時伝承されていた規則 1.1.5 の形が kkṅiti ca であったことを示している（MBh on A 3.2.139 [II.132.11–12]: tad gakāragrahaṇaṃ kartavyam | na kartavyam | kriyate nyāsa eva | kakāre gakāraś cartvabhūto nirdiśyate | kkṅiti ceti）。

『カーシカー注解』の解釈に従う場合、全体として「指標辞 G, K または Ṅ を有する接辞が後続する場合にも、グナおよびヴリッディの代置は行われない。」と規則を解釈することになる。

【例】

以下の語はそれぞれ指標辞 K, Ṅ または G をもつ（あるいは持っていると見なされる）接辞によって派生される。1.1.5 のため、グナの代置（*cetaḥ, *cenutaḥ, *jeṣṇuḥ）は行われていない。citaḥ「集められた〔もの〕」は接辞 Kta（1.1.26）による過去受動分詞である。cinutaḥ「彼ら 2 人は集める」は第 5 類現在形で、接辞 Śnu（3.1.73）が付与されている。1.2.4 によって Śnu は Ṅ をもつものとして振る舞う。jiṣṇuḥ「勝利を収めた〔もの〕」には接辞 Ksnu（3.2.139）が付与されている。『カーシカー注解』はこの接辞を Gsnu と見なす（8.4.55, KV on A 3.2.139 [I.241]）。

【規則】

1.1.6 dīdhīvevīṭām ||

/dīdhī-vevī-iṬ.GEN.PL ca/

「dīdhī『考察する』、vevī『注意を向ける』、加音 iṬ にもグナおよびヴリッディの代置は行われない。」

【略説】

1.1.3 で述べられた iK への代置操作が行われない場合を規定している。ここで「加音」と訳した原語は āgama であり、付加される何らかの音素を指す。「加音 iṬ」における Ṭ は指標辞であり、これを付すことによって、この加音が挿入される場所を指定している（1.1.46）。

【例】

中性の動作名詞である ādīdhyanam「考察すること」と āvevyanam「注意を向けること」は、接辞 LyuṬ（3.3.115）すなわち -ana-（7.1.1）によって派生するものである。また、kaṇitā śvaḥ「明日、彼は声を上げて嘆くであろう」における複合未来形 kaṇitā は加音 iṬ（7.2.35）を含む。通常、グナの代置（*ādīdhayanam, *āvevayanam, *kaṇetā）が期待される（7.3.84, 86）が、1.1.6 によってそれは妨げられる。

【規則】

1.1.7 halo ’nantarāḥ saṃyogaḥ ‖

/haL.NOM.PL anantara.NOM.PL saṃyoga.NOM.SG/

「直接連続する子音は〈saṃyoga 結合子音〉と呼ばれる。」

【略説】

〈saṃyoga 結合子音〉という術語を規定している。何ら母音が介在せずに連続する子音群が〈saṃyoga 結合子音〉と呼ばれる。規則中に述べられる haL は、音素表の h から L までに含まれる音を指示する短縮記号であり（1.1.71）、すべての子音を指す。

【例】

agniḥ「火」における -gn- や、tilān stry āvapati「女性が胡麻の種を撒く」における -n stry などが結合子音の例として挙げられる。

【規則】

1.1.8 mukhanāsikāvacano ’nunāsikaḥ ‖

/mukha-nāsikā-vacana.NOM.SG anunāsika.NOM.SG/

「口と鼻の両方で発せられる音は〈anunāsika 鼻通音〉と呼ばれる。」

【略説】

〈anunāsika 鼻通音〉という術語を規定している。それは口と鼻を同時に使って発せられる鼻がかった音である。より厳密に言うと、軟口蓋を下げることで空気を鼻に送り、鼻孔を通って響かせる音である。パーニニは文典中で鼻音性を備えた音、すなわち鼻音および鼻音化された母音と半母音をこの〈anunāsika 鼻通音〉という術語で指示している（8.3.2, 8.4.45）。原語の意味を考慮して、「鼻音」ではなく「鼻通音」と訳す。

【例】

以下の例では、小辞 á は母音の前で鼻通音（ここでは鼻母音）になる（6.1.126）：abhrá ā̃m̆ apáḥ「雲において水たちを〜」（ṚV 5.48.1cd）。

【規則】

1.1.9 tulyāsyaprayatnaṃ savarṇam ‖

/tulya-āsya-prayatna.NOM.SG savarṇa.NOM.SG/

「同じ調音位置と調音動作で発せられる音は、〈savarṇa 同類音〉と呼ばれる。」

【略説】

〈savarṇa 同類音〉という術語を規定している。音が発生される場所である調音位置には、軟口蓋（kaṇṭha「喉」）、硬口蓋（tālu）、口腔内の最上点（mūrdhan）、歯（danta）、唇（oṣṭha）の 5 つがある。規則中で言われる調音動作（prayatna「労力」）とは調音器官（舌とこれら 5 つの調音者 [articulator] ）が行う動作のことであり、現代の音声学で言う調音法と類似する概念である。

1. 母音は接触がない開いた形で（aspr̥ṣṭa/vivr̥ta）、2. 摩擦音は少し開いた形で（īṣad-vivr̥ta）、3. 半母音は少しの接触がある形で（īṣat-spr̥ṣṭa）、4. それ以外の子音（閉鎖音）は完全に接触させる形で（spr̥ṣṭa）発音される。このように、1. 母音、2. 摩擦音、3. 半母音、4. 閉鎖音は、この順番のもと調音器官同士の接触度合いの違いによって説明される。ここで注意すべきは、この配列の仕方は音の相対的な大きさ（ソノリティ）を基準にして母音＞接近音＞摩擦音＞閉鎖音の順番に並べる現代の音韻論とは異なるということである[28]。

2 つ以上の音がこのような調音位置と調音法を同じくしているとき、それらの音は〈同類音〉と呼ばれる。ここで言われる調音動作は口腔内で行われるものが意図されており、口腔外の動作は意図されていない。したがって、口腔外の調音動作によって生み出される有声音と無声音の区別や有気音と無気音の区別は、特定の 2 つの音が同類音と見なされることを妨げない。たとえば、k 音は無声音、g 音は有声音であるが、両者は同じ調音位置（喉）と口腔内の同じ調音動作（完全閉鎖）を有する点で同類音と理解される。k 音という無気音と kh 音という有気音の場合も同様である。

【例】

daṇḍāgram「棒の先端」は daṇḍa + agra からなる複合語で、先行語の末母音 -a と後続語の初頭母音 a- は同類音であるので、長母音 -ā- となる（6.1.101）。

[28] 古代インドにおける調音法の分類の仕方と問題については Allen (1953: 24–32) を参照せよ。

【規則】

1.1.10 nājjhalau ||

/na aC-haL.NOM.DU/

「母音と子音が共に〈savarṇa 同類音〉と呼ばれることはない。」

【略説】

2 つの音が〈savarṇa 同類音〉と呼ばれない場合を規定している。1.1.9 によれば、同じ調音位置と調音動作で発せられる音は同類音と見なされる。パーニニが採用する音声学の見方では、たとえば母音 i と子音 ś は硬口蓋という同じ調音位置と調音器官同士の同じ接触度合いを持つと考えられている（1.1.9 の略説を参照せよ）。すると、i と ś は同類音と見なされてしまい、その結果、望ましくない文法操作が適用されて望ましくない語形が派生されてしまう。そのような事態を防ぐのが当該の規則である。

厳密にいうと、母音 i と子音 ś の調音動作は異なる。つまり、母音 i は調音器官同士（舌と硬口蓋）が完全に開いており（vivṛta）、摩擦音 ś は同じ調音器官同士が少し開いている（īṣad-vivṛta）。このように、母音と子音はそもそも厳密な意味での同類音とはならないという理由から、カーティヤーヤナは当該規則を不要とする（vt. 3 on A 1.1.10）。詳細は不明であるが、規則 1.1.10 が定式化されているということは、母音と子音が全く同じ調音位置と調音動作を共有するという考え方があったことになる。

【例】

dadhiśītam「発酵乳のように冷たい〔もの〕」（2.1.55）。ここで母音 i と子音 ś が同類音と見なされると 6.1.101 によって*dadhītam が導かれてしまうが、そのことは 1.1.10 によって妨げられる。

【規則】

1.1.11 īdūded dvivacanam pragṛhyam ||

/īT-ūT-eT.NOM.SG dvivacana.NOM.SG pragṛhya.NOM.SG/

「母音 -ī, -ū, -e で終わる双数語尾は〈pragṛhya 非結合要素〉と呼ばれる。」

【略説】

〈pragṛhya 非結合要素〉という術語を規定している。通常、母音と母音が隣り合うと、特定の諸規則が適用されて連声（母音融合）が起こるが、〈pragṛhya 非結合要素〉という術語で呼ばれる母音には連声は起こらない（6.1.125）。つまり当該規則は、ある一定の母音に対しては連声が起こらないことを確保するための術語規則である。

【例】

以下の例では、-ī, -ū, -e で終わる双数語尾の後に iti が後続する。これは、これらの語尾が非結合要素であることを示すと同時に、『パダ・パータ』における iti の使い方に倣ったものでもあ

る[29]：agnī iti「2 つの火」、vāyū iti「2 つの風」、māle iti 「2 つの花輪」、pacete iti「彼ら 2 人は煮る」。

【規則】

1.1.12 adaso māt ||

/adas.GEN.SG m.ABL.SG/

「指示詞 adas の m に後続する末母音（amī の -ī, amū の -ū）は〈pragṛhya 非結合要素〉と呼ばれる。」

【略説】

1.1.11 と同様、特定の母音が〈pragṛhya 非結合要素〉という術語で呼ばれることを規定している。

【例】

次の例では、amī は男性主格複数、amū は男性・女性・中性主格双数の形である：amī āsate「あの者たちは座っている」、amū āsāte「あの 2 人は座っている」。これら amī の -ī と amū の -ū は 1.1.12 によって〈pragṛhya 非結合要素〉と呼ばれる。それゆえ、後続する母音と連声を起こすことは 6.1.125 によって妨げられる。

【規則】

1.1.13 śe ||

/Śe.NOM.SG/

「Śe は〈pragṛhya 非結合要素〉と呼ばれる。」

【略説】

1.1.11 と同様、特定の母音が〈pragṛhya 非結合要素〉という術語で呼ばれることを規定している。当該の Śe は、ヴェーダ語において所格形の末尾にアクセントを持って現れる名詞語尾 -é に対応するものであり、パーニニ文法では通常の名詞語尾に対する代置要素として振る舞う（7.1.39）。Śe の Ś は指標辞であり（1.3.8）、-e が名詞語尾に代置されるとき、その名詞語尾全体に取って代わることを示す役割がある（1.1.55）。

【例】

『カーシカー注解』は次のヴェーダ語形 asmé, yuṣmé, mé, tvé（いずれも所格形）を挙げている。yuṣmé の例として挙げられている ṚV 8.68.19a に関して、『サンヒター・パータ』（*Saṃhitāpāṭha*）では次に子音が後続しているため、〈pragṛhya 非結合要素〉という名称を与えることでもたらされるべき結果が見えない。ṚV 8.18.19c yuṣmé íd vo ápi ṣmasi sajātyè がより適切な例であると思われる。ná yuṣmé vājabandhavaḥ（*Padapāṭha*: yuṣmé íti）「獲物の仲間たちよ、あなたたちに〜な

[29] Ojihara and Renou (1960: 49, note 3).

い」（ṚV 8.68.19a）、asmé indrābṛhaspatī（*Padapāṭha*: asmé íti）「インドラとブリハスパティよ、私たちに～」（ṚV 4.49.4a）、tvé rā́yaḥ, mé rā́yaḥ「あなたに富が、私に富が」（VS 4.22）。

【規則】

1.1.14 nipāta ekāj anāṅ ‖

/nipāta.NOM.SG eka-aC.NOM.SG an-āṄ.NOM.SG/

「āṄ を除いて、1 つの母音のみからなる小辞は〈pragṛhya 非結合要素〉と呼ばれる。」

【略説】

単音である小辞（nipāta）が〈pragṛhya 非結合要素〉と呼ばれることを規定している。〈nipāta 小辞〉もまた、特定の項目に対して適用される術語である（1.4.56 以下）。āṄ はこの小辞の一種であり（1.4.58）、奪格形と共に用いられて「～まで」を意味したり、動詞前接辞として現れたりする ā に対応する。パーニニ文法では、この āṄ は具格単数形の語尾としても使われる（7.3.120）。この格語尾としての āṄ はパーニニ以前の文法学伝統から引き継がれた用語であると通常考えられている。パーニニ文法の体系では、具格単数形の語尾は通常 Ṭā によって表される（4.1.2）。

これら小辞としての āṄ の Ṅ や格語尾としての āṄ の Ṅ という指標辞が、パーニニ文法の中でどのような役割を果たすのかは不明である。

【例】

『カーシカー注解』は 1 つの母音からなる小辞の例として間投詞の a, i, u を挙げている。注釈によると、これらの間投詞は驚きや疑念を表すとされているが、意味の詳細は不明である。i indram paśya「おい、インドラを見よ！」のように、間投詞 i は 1.1.14 によって〈pragṛhya 非結合要素〉と呼ばれることで、後続する indram の初頭母音と結合しない（6.1.125）。

【規則】

1.1.15 ot ‖

/oT.NOM.SG/

「母音 -o で終わる小辞は〈pragṛhya 非結合要素〉と呼ばれる。」

【略説】

パーニニ文典中で規定される小辞（nipāta）のうち（1.4.56 以下）、最終音に -o を持つ小辞が〈pragṛhya 非結合要素〉と呼ばれることを規定している。

【例】

āho iti（問いかけなどを表す小辞 āho + pragṛhya を示すための iti）では、āho は非結合要素として扱われており、それゆえ後続する母音と連声を起こしていない（6.1.125）。

【規則】

1.1.16 sambuddhau śākalyasyetāv anārṣe ||

/sambuddhi.LOC.SG śākalya.GEN.SG iti.LOC.SG an-ārṣa.LOC.SG/

「シャーカリヤによると、聖仙に由来する iti（ヴェーダの原典に現れる iti）でなければ、iti の前では呼格単数語尾における -o は〈pragṛhya 非結合要素〉と呼ばれる。」

【略説】

〈pragṛhya 非結合要素〉と呼ばれる対象をさらに規定している。規則に出る〈sambuddhi 呼びかけ語尾〉は呼格単数語尾（呼びかけのために使われる第 1 格単数語尾）に対して付される術語である（2.3.49）。

シャーカリヤはパーニニ以前の学者で、『リグ・ヴェーダ』を語ごとに区切り、かつときおり語内部の区切りを示す『パダ・パータ』（*Padapāṭha*）をつくった。「聖仙に由来する iti」とは、聖仙がもたらしたとされるヴェーダ聖典内で実際に使用される iti のことであり、この iti の前にある呼格単数語尾の -o は〈pragṛhya 非結合要素〉とは呼ばれない。一方、シャーカリヤの『パダ・パータ』中で使用される iti の前では、呼格単数語尾の -o は〈pragṛhya 非結合要素〉と呼ばれ、それによって連声規則の適用が妨げられる（6.1.125）[30]。

【例】

vāyo iti「ヴァーユよ」のように、『パダ・パータ』では -o で終わる呼格形の後に小辞 iti が加えられるが、この場合 -o は非結合要素として扱われる。

【規則】

1.1.17–18 uña ūṁ ||

/uÑ.GEN.SG ūṁ.NOM.SG/

「シャーカリヤによると、聖仙に由来する iti（ヴェーダの原典に現れる iti）でなければ、iti の前では uÑ に ūṁ が代置され、この ūṁ は〈pragṛhya 非結合要素〉と呼ばれる。」

【略説】

現在伝わる 1.1.17 uñaḥ と 1.1.18 ūṁ はもともと 1 つの規則 uñaḥ ūṁ を形成していた。それを現在の形にはじめて二分したのはカーティヤーヤナである。この二分された 1.1.17 uñaḥ と 1.1.18 ūṁ はそれぞれ「uÑ が〈pragṛhya 非結合要素〉と呼ばれること」と「uÑ の代置要素である ūṁ が〈pragṛhya 非結合要素〉と呼ばれること」を規定している。

---

[30] Thieme (1935: 3): “[A 1.1.16] means…nothing more than: ‘a vocative in *o* is pragṛhya in the Padapāṭha only.’ An exception is formed by the SV. [*Sāmaveda*] Padapāṭha. There can be no doubt that Pāṇini is alluding to Śākalya as the author of the RV. [*Ṛgveda*] Padapāṭha.”『パダ・パータ』以外で、呼格単数語尾 -o が〈pragṛhya 非結合要素〉として扱われている唯一の例は pito á「液体（pitu）よ」（TS 5.7.2.4 など）である。これは小辞 u を含む átho, utó, mó などの -o で終わる形（いずれも〈pragṛhya 非結合要素〉）から単発的に広がったものと思われるが、このような例をもとに『パダ・パータ』では呼格単数語尾 -o は一律に〈pragṛhya 非結合要素〉として扱われていると考えられる（AiG I: 326）。

一方、本来の形 ūñaḥ ūm̐ は、シャーカリヤの『パダ・パータ』では u の代わりに ūm̐ が起こり、その ūm̐ が〈pragṛhya 非結合要素〉と呼ばれることを規定している。この規定により、ūm̐ と次の iti の i- が連声を起こすことが妨げられる。当該規則で使われる uÑ はヴェーダ語に現れる小辞 u/ū「一方で、また」を指示するものである。

【例】

『リグ・ヴェーダ』や『アタルヴァ・ヴェーダ』の『パダ・パータ』では、『サンヒター・パータ』における小辞 u（あるいは ū）は、ūm̐ iti のように非結合要素として扱われている。その結果、後続する母音との連声は起こっていない（6.1.125）

【規則】

1.1.19 īdūtau ca saptamyarthe ||

/īT-ūT.NOM.DU ca saptamī-artha.LOC.SG/

「また、第 7 格語尾の意味を表す場合、末母音 -ī, -ū は〈pragṛhya 非結合要素〉と呼ばれる。」

【略説】

〈pragṛhya 非結合要素〉と呼ばれる対象をさらに追加している。パーニニ文法では格語尾として第 1 格語尾から第 7 格語尾までの 7 つの格語尾が設定されている。そのうち、当該規則で述べられる第 7 格語尾（saptamī）は、現代で言う所格を表す語尾に対応する。この所格語尾が表示する意味とは「基体、場」（adhikaraṇa）である（2.3.36）。この意味と同じ意味を担うとき、末母音 -ī と -ū に〈pragṛhya 非結合要素〉という術語が適用される。

【例】

sómo gaurī́ ádhi śritáḥ「ソーマは雌の水牛〔の皮〕の上に置かれた」（ṚV 9.12.3c）における gaurī́ の -ī、また adhy asyām māmakī tanū「この私の身の上に」（AVP 6.6.8d）における māmakī および tanū の -ī, -ū が非結合要素の例として挙げられている。後者の例は母音が後続していないため、〈pragṛhya 非結合要素〉という名称を与えることでもたらされるべき結果が見える形にはなっていない。前者の場合、gaurī́ の -ī が〈pragṛhya 非結合要素〉と呼ばれることで、その母音と後続母音の間に連声が起こることは妨げられる（6.1.125）。

【規則】

1.1.20 dādhā ghv adāp ||

/dā-dhā.NOM.PL ghu.NOM.SG a-dāP.NOM.SG/

「語根 dā および dhā は〈ghu グ〉と呼ばれる、dāP を除いて。」

【略説】

〈ghu グ〉という術語を規定している。規則が述べる「dā および dhā」には dāṆ「与える」（yacchati, 7.3.78）、ḌUdāÑ「与える」（dadāti, datte）、deṄ「守る、養育する」（dayate）、do「切る」（dyati）、dheṬ「吸う」（dhayati）、ḌUdhāÑ「置き定める、つくる」（dadhāti, dhatte）

という 6 つの動詞語根が含まれる。いずれも『動詞語基表』に記載されているものである。

一方、この〈ghu グ〉という術語が適用されない対象として規定されている dāP には daiP「洗う、きれいにする」（dāyati）、dāP「刈る」（dāti）の 2 つがあり、いずれも同じく『動詞語基表』に記載されている。

ghu は実際の言語運用では見出されない語であり、そのような語を用いて作られた術語は「人工的術語」（kṛtrimā sañjñā）と言われる。この〈ghu グ〉という術語を上記の動詞語根に付すことによって、それらに対して特定の文法操作が適用されることが確保される。

【例】

以下の例では、〈ghu グ〉と呼ばれる 6 つの語根から派生した現在形もしくは複合未来形の前に動詞前接辞 pra および ni が置かれている。8.4.17 によって、〈ghu グ〉と呼ばれる語根の前にある動詞前接辞 ni の n- は pra の後で ṇ- によって代置される：ḌUdāÑ = dā「与える」（DhP III.9）→ praṇidadāti; dāṆ = dā「与える」（DhP I.977）→ praṇidātā; do「切る」（DhP IV.40）→ praṇidyati; deÑ「守る」（DhP I.1011）→ praṇidayate; ḌUdhāÑ = dhā「置き定める」（DhP III.10）→ praṇidadhāti; dheṬ「吸う」（DhP I.951）→ praṇidhayati vatso mātaram「仔牛は母の乳を吸う」。

以下の語根 dāP, daiP は〈ghu グ〉と呼ばれないので、7.4.46, 47 が適用されず、その過去受動分詞は*dattam, *ttam とはならない：dāP「刈る」（DhP II.50）→ dātam barhiḥ「刈られた敷き草」、daiP「洗う」（DhP I.971）→ avadātam mukham「洗われた顔」。

【規則】

1.1.21 ādyantavad ekasmin ||

/ādi-anta-vat eka.LOC.SG/

「単音からなる要素に規則が適用される場合、その要素は初頭要素あるいは末要素として扱われる。」

【略説】

a などの単音からなる要素は、単音であるため「何かの初めの要素」でもなければ「何かの終わりの要素」でもない。つまり、単音には初めも終わりも設定できないが、パーニニ文法には何かの初めの要素や何かの終わりの要素に対して文法操作を規定する諸規則がある。状況に応じてそのような文法操作を単音である要素にも適用するために、当該の規則が設けられている。当該の規則により、単音からなる要素を「何かの初めの要素」あるいは「何かの終わりの要素」として扱うことが保証される。

【例】

aupagavám「ウパグの子以降の子孫」には、単音からなる接辞 aṆ（4.1.92）が付与されている。3.1.3 は接辞の初頭母音に高アクセント（udātta）の付与を規定する（たとえば kartávyam「〔何かが〕なされるべき」における接辞 -távya- のように）。1.1.21 によって単音からなる接辞 aṆ を初頭要素として見なすことが可能となり、したがって 3.1.3 が適用された aupagavám が正し

く派生される。また、たとえば vṛkṣa「木」から vṛkṣābhyām（具格・与格・奪格双数）を派生する場合、語基 vṛkṣa- の末要素 -a は 7.3.102 によって長母音 -ā となる。同様に、近称指示代名詞 ābhyām は語基 a- から派生されるが（7.2.113）、1.1.21 によってこの単音からなる a- は末要素として見なされ、7.3.102 が適用可能となる。

【規則】

1.1.22 taraptamapau ghaḥ ‖

/taraP-tamaP.NOM.DU gha.NOM.SG/

「接辞 taraP および tamaP は〈gha ガ〉と呼ばれる。」

【略説】

taraP は比較級の語形を派生する接辞、tamaP は最上級の語形を派生する接辞である。当該規則はこれら 2 つの接辞に〈gha ガ〉という術語を付与する。この〈gha ガ〉は、1.1.20 の〈ghu グ〉と同様、「人工的術語」である。taraP と tamaP に付されている P は指標辞であり、これら 2 つの接辞の導入によって語形が派生するとき、接辞の部分には高アクセントが置かれないことを示す（3.1.4）。

【例】

kumāritarā「より若い娘」および kumāritamā「最も若い娘」は kumārī「若い娘」から派生されるが、〈gha ガ〉と呼ばれる接辞 taraP および tamaP の前で女性形形成接辞 -ī-（Ṅī）は -i- となる（6.3.43）。

【規則】

1.1.23 bahugaṇavatuḍati saṅkhyā ‖

/bahu-gaṇa-vatU-Ḍati.NOM.SG saṅkhyā.NOM.SG/

「bahu『多数の』、gaṇa『群』および接辞 vatU, Ḍati で終わる語は〈saṅkhyā 数詞〉と呼ばれる。」

【略説】

bahu「多数の」という語、gaṇa「群」という語、そして vatU（たとえば tāvat「それくらい」、5.2.39）や Ḍati（たとえば kati「どれくらい」、5.2.41）という接辞で終わる語、これら三種の語に〈saṅkhyā 数詞〉という術語を適用している。これらは eka「1」、dvi「2」などとは違って、通常、数詞とは見なされない。そこで、これらの語もすべて数詞として扱い、数詞に対して適用される文法操作をこれらの語にも適用するために、当該規則が設けられている。

【例】

bahu「多数の」などの語に〈saṅkhyā 数詞〉という術語を与えることによって、次のような語形が派生可能となる：bahukṛtvaḥ「たびたび」（5.4.17）、bahudhā「様々に」（5.3.42）、bahukaḥ「数多くで買われた」（5.1.22）、bahuśaḥ「数回にわたって」（5.4.43）。gaṇakṛtvaḥ, gaṇadhā, gaṇakaḥ, gaṇaśaḥ, tāvatkṛtvaḥ, tāvaddhā, tāvatkaḥ, tāvacchaḥ, katikṛtvaḥ, katidhā, katikaḥ, katiśaḥ も同様

である。

【規則】

1.1.24 ṣṇāntā ṣaṭ ‖

/ṣ-n̲a̲-antā.NOM.SG ṣaṣ.NOM.SG/

「子音 -ṣ または -n で終わる数詞は〈ṣaṣ シャシュ〉と呼ばれる。」

【略説】

数詞のうちでも、-ṣ または -n という子音で終わるものに対して〈ṣaṣ シャシュ〉というさらなる術語を規定している。この術語を付すことにより、同術語を根拠とした文法操作の適用を確保している。子音 -ṣ で終わる数詞は ṣaṣ「6」、-n で終わる数詞は pañcan「5」、saptan「7」、aṣṭan「8」、navan「9」、daśan「10」の 5 つである。

【例】

ṣaṭ tiṣṭhanti「6（人）が立っている」や、ṣaṭ paśya「6（人）を見よ！」が示しているように、〈ṣaṣ シャシュ〉と呼ばれる数詞 ṣaṣ「6」の主格・対格複数語尾にはゼロが代置される（7.1.22）。

【規則】

1.1.25 ḍati ca ‖

/Ḍati.NOM.SG ca/

「接辞 Ḍati で終わる数詞も〈ṣaṣ シャシュ〉と呼ばれる。」

【略説】

数詞のうち、1.1.23 で規定された Ḍati で終わる数詞もまた、〈ṣaṣ シャシュ〉というさらなる術語を得ることが規定されている。その目的は 1.1.24 と同じである。

接辞 Ḍati における指標辞 Ḍ は、その接辞が導入される語幹の最終母音から始まる要素がすべて脱落することを示す（kim + Ḍati > kØØ + ati > kati「どれくらい」、6.4.143）。

【例】

kati tiṣṭhanti「何人が立っているのか？」や、kati paśya「どれぐらいかを見よ！」が示しているように、〈ṣaṣ シャシュ〉と呼ばれる kati「どれぐらい」の主格・対格複数語尾にはゼロが代置される（7.1.22）。

【規則】

1.1.26 ktaktavatū niṣṭhā ‖

/Kta-KtavatU.NOM.DU niṣṭhā.NOM.SG/

「接辞 Kta および KtavatU は〈niṣṭhā ニシュター〉と呼ばれる。」

【略説】

Kta と KtavatU が〈niṣṭhā ニシュター〉（「〔行為の〕完成（？）」）という術語で呼ばれることを規定している。Kta は一般的に過去受動分詞を作る接辞、KtavatU は過去能動分詞を作る接辞である。両接辞における K は指標辞であり、これらの接辞が導入される動詞語基の母音がゼロ階梯で現れることを示している（1.1.5）。接辞 KtavatU に付された U も指標辞であり、KtavatU が後続する語幹が特定の条件下で加音 nuM をとることを示す（たとえば kṛtavān「〔何かを〕なした者」の -n［7.1.70］）。

【例】

kṛtaḥ「された〔もの〕」は接辞 Kta による過去受動分詞である。kṛtavān「〔何かを〕なした者」は接辞 KtavatU による過去能動分詞である。

【規則】

1.1.27 sarvādīni sarvanāmāni ||

/sarva-ādi.NOM.PL sarvanāman.NOM.PL/

「sarva『すべての』等の項目は〈sarvanāman 代名詞〉と呼ばれる。」

【略説】

規則中で x-ādi「x などの項目、x で始まる項目」といった表現によって、規定の対象となる特定の語群が言及される。そのような語群は『名詞語基表』の中で与えられている。ここでは sarvādi「sarva『すべての』などの項目、sarva『すべての』で始まる項目」という表現によって『名詞語基表』第 241 番目の語群（GP 241）に挙げられているすべての項目が指示され、これらすべての項目が〈sarvanāman 代名詞〉（「すべてのものの名」）という術語で称されることが規定されている。これによって、これらの項目が通常の名詞変化ではなく代名詞変化をすることが保証される。

【例】

〈sarvanāman 代名詞〉という術語を与えることによって、たとえば sarva「すべての」の主格複数形は sarve（7.1.17）、与格形は sarvasmai（7.1.14）、奪格形および所格形は sarvasmāt, sarvasmin（7.1.15）、属格複数形は sarveṣām（7.1.52）となる。sarva 群に含まれる viśva「すべての」などにも同様の操作が適用される。

【規則】

1.1.28 vibhāṣā diksamāse bahuvrīhau ||

/vibhāṣā dik-samāsa.LOC.SG bahuvrīhi.LOC.SG/

「方角の複合語であるバフブリーヒにおいて、sarva『すべての』等の項目は任意に〈sarvanāman 代名詞〉と呼ばれる。」

【略説】

バフブリーヒ（bahuvrīhi「多米複合語、所有複合語」）は、2.2.24–28 で規定される複合語（samāsa）の一種である。この複合語が方角を意味する語から構成される場合、それらの語は sarva 群に含まれる項目であるとしても、それらが〈sarvanāman 代名詞〉と呼ばれる（1.1.27）のは任意であることを規定している。つまり、呼ばれても呼ばれなくてもよいということである。これによって、当該の複合語には名詞変化も代名詞変化も許されることになる。

「任意」（vibhāṣā）が何を意味するかは 1.1.44 にて規定される。それによると、「A である、あるいは A ではない」が「任意」の意味である。

【例】

2.2.26 によって uttara「北」と pūrva「東」は、「中間の」（antarāla）方角を表すバフブリーヒである uttarapūrvā「北東の（女性形）」を形成する。たとえばこの語の与格形を作る場合、1.1.28 によって uttarapūrvasyai（代名詞変化）（Ṅe 4.1.2, Ṅe > -syai, -ā-syai > -a-syai 7.3.114）でも uttarapūrvāyai（通常の名詞変化）（Ṅe 4.1.2, Ṅe > -yai 7.3.113）でも許されることになる。

【規則】

1.1.29 na bahuvrīhau ||

/na bahuvrīhi.LOC.SG/

「バフブリーヒにおいて、sarva『すべての』等の項目は〈sarvanāman 代名詞〉と呼ばれない。」

【略説】

バフブリーヒ複合語の中に sarva 群の項目が現れる場合、それらが〈sarvanāman 代名詞〉という術語を得ることが禁止されている。当該規則によって、この種の所有複合語には名詞変化のみが許され、代名詞変化は許されないことになる。直前の 1.1.28 と当該規則を合わせて考えると、所有複合語を構成する sarva 群の項目は原則として〈sarvanāman 代名詞〉という術語で呼ばれないが、その項目が方角を示すものである場合、術語の獲得と禁止はいずれも任意に可能ということになる。すなわち、名詞変化と代名詞変化のいずれもが許される。

【例】

通常、viśva「すべての」は代名詞変化をするが、priyaviśvāya「すべてが愛しい者に（与格単数）」（Ṅe 4.1.2, Ṅe > -ya 7.1.13, -a-ya > -ā-ya 7.3.102）のようなバフブリーヒ複合語に現れる場合、〈sarvanāman 代名詞〉という術語の適用は 1.1.29 によって禁止され、正しくない語形である *priyaviśvasmai（Ṅe 4.1.2, Ṅe > -smai 7.1.14）が派生されることはない。

【規則】

1.1.30 tṛtīyāsamāse ||

/tṛtīyā-samāsa.LOC.SG/

「第 3 格語尾で終わる語との複合語において、sarva『すべての』等の項目は〈sarvanāman 代名詞〉と呼ばれない。」

【略説】

パーニニ文法において tṛtīyā は第 3 格語尾を指示する語であり、具格接辞に対応する。そのような具格接辞で終わる語（具格形）とともに構成されていると分析される複合語においては、sarva 群の項目は〈sarvanāman 代名詞〉とは呼ばれないことを規定している。これによって、この種の複合語には名詞変化のみが許され、代名詞変化は許されないことになる。

【例】

māsapūrvāya「一ヶ月前の、一ヶ月早い（与格単数）」（Ṅe 4.1.2, Ṅe > -ya 7.1.13, -a-ya > -ā-ya 7.3.102）は māsena pūrvasmai から派生されるが、ここで複合語の先行語は具格形（第 3 格語尾で終わる語）として分析されるものである。1.1.30 によって、このような複合語に現れる pūrva「前の」に対する〈sarvanāman 代名詞〉という術語の適用は禁止される。結果、*māsapūrvasmai（Ṅe 4.1.2, Ṅe > -smai 7.1.14）という語形の派生が防がれる。

【規則】

1.1.31 dvandve ca ||

/dvandva.LOC.SG ca/

「ドゥヴァンドゥヴァに現れる場合にも、sarva『すべての』等の項目は〈sarvanāman 代名詞〉と呼ばれない。」

【略説】

ドゥヴァンドゥヴァ（dvandva「並列複合語、連繋複合語」）はパーニニ文法で規定される複合語の一種である（2.2.29）。この種の複合語が sarva 群の項目によって構成されているとき、sarva 群の項目には〈sarvanāman 代名詞〉という術語が適用されないことを規定している。これによって、sarva 群の項目からなるドゥヴァンドゥヴァ複合語には名詞変化のみが許され、代名詞変化は許されないことになる。

【例】

ドゥヴァンドゥヴァ複合語である pūrva-apara「前のものと後のもの」に現れる語には〈sarvanāman 代名詞〉という術語が与えられないことから、その属格複数形は pūrvāparāṇām（名詞変化）（-ām 4.1.2, -ām > -n-ām 7.1.54, -a-n-ām > -ā-n-ām 7.3.102）となり、*pūrvāpareṣām（代名詞変化）（-ām 4.1.2, -ām > -s-ām 7.1.52, -a- > -e- 7.3.103）とはならない。

【規則】

1.1.32 vibhāṣā jasi ||

/vibhāṣā Jas.LOC.SG/

「ドゥヴァンドゥヴァに現れ、かつ主格複数語尾 Jas が後続する場合、sarva『すべての』等の項目は任意に〈sarvanāman 代名詞〉と呼ばれる。」

【略説】

直前の規則 1.1.31 では、ドゥヴァンドゥヴァ複合語を構成する sarva 群の項目が〈sarvanāman 代名詞〉と呼ばれることは禁じられているが、当該規則では、sarva 群の項目からなるドゥヴァンドゥヴァ複合語に主格複数語尾 Jas が後続する場合には〈sarvanāman 代名詞〉という術語の付与が任意に可能であることが述べられている。これによって、sarva 群の項目からなるドゥヴァンドゥヴァ複合語であっても、その主格複数形は通常の名詞変化のものでも代名詞変化のものでも許されることになる。

【例】

ドゥヴァンドゥヴァ複合語である katara-katama「（2 つの中の）どれかと（多くの中の）どれか」の主格複数形を派生する場合、主格複数語尾 Jas（4.1.2）が導入された katarakatamāḥ（名詞変化）も、あるいは Jas に接辞 Śī（7.1.17）が代置された katarakatame（代名詞変化）も許される。

【規則】

1.1.33 prathamacaramatayālpārdhakatipayanemāś ca ||

/prathama-carama-taya-alpa-ardha-katipaya-nema.NOM.PL ca/

「また、主格複数語尾 Jas が後続する場合、prathama『最初の』、carama『最後の』、接辞 taya で終わる語、alpa『少しの』、ardha『半分の』、katipaya『いくらかの』、nema『ある 1 つの、相当数の、半分の』も任意に〈sarvanāman 代名詞〉と呼ばれる。」

【略説】

主格複数語尾 Jas が後続する場合、ここに挙げられた語には任意に〈sarvanāman 代名詞〉という術語が与えられることを規定している。これによって、これらの語の主格複数形は名詞変化のものでも代名詞変化のものでも許されることになる。規則中に述べられる接辞 -taya- は 5.2.42–44 で規定される tayaP 接辞を指す。

【例】

1.1.33 によって、主格複数語尾 Jas（4.1.2）が導入された prathamāḥ「最初の」（名詞変化）も、あるいは Jas に接辞 Śī（7.1.17）が代置された prathame（代名詞変化）も許される。他の語についても同様である：caramāḥ ~ carame, dvitayāḥ ~ dvitaye（接辞 tayaP 5.2.42–44）, alpāḥ ~ alpe, ardhāḥ ~ ardhe, katipayāḥ ~ katipaye, nemāḥ ~ neme.

【規則】

1.1.34 pūrvaparāvaradakṣiṇottarāparādharāṇi vyavasthāyām asañjñāyām ||

/pūrva-para-avara-dakṣiṇa-uttara-apara-adhara.NOM.PL vyavasthā.LOC.SG a-sañjñā.LOC.SG/

「主格複数語尾 Jas が後続し、かつ時間的・空間的な位置を表す場合、pūrva『前の、東の』、para『後の』、avara『下の、西の』、dakṣiṇa『右の、南の』、uttara『上の、北の』、apara『後の、西の』、adhara『下の』は任意に〈sarvanāman 代名詞〉と呼ばれる、それが名称語として使われる場合を除いて。」

【略説】

ここに挙げられる語に主格複数語尾 Jas が後続し、かつこれらの語が時間的な位置や空間的な位置を表すものとして使用されている場合、それらには〈sarvanāman 代名詞〉という術語が付与される。これによって、時間的な位置や空間的な位置を表すこれらの語の主格複数形は、通常の名詞変化のものでも代名詞変化のものでも許されることになる。ただし、これらの語が時間的あるいは空間的な位置を表すとしても、それが名称語（sañjñā）である場合には、〈sarvanāman 代名詞〉という術語の付与はなされず、主格複数形としては名詞変化のものだけが許される。

名称語とは、語源的な意味の伝達を意図しない語のことである。たとえばシヴァ神を指す śaṅkara という語が名称語として意図される場合、この語は「シャンカラ」というシヴァの名称を伝えるのみであり、「安寧をもたらす者」という語源的意味を伝えることはない。

【例】

1.1.34 によって、主格複数語尾 Jas（4.1.2）が導入された pūrvāḥ「前の、東の」（名詞変化）も、あるいは Jas に接辞 Śī（7.1.17）が代置された pūrve（代名詞変化）も許される。他も語の場合も同様である：parāḥ ~ pare, avarāḥ ~ avare, dakṣiṇāḥ ~ dakṣiṇe, uttarāḥ ~ uttare, aparāḥ ~ apare, adharāḥ ~ adhare。この規定はこれらの語が時間的・空間的な位置を表す非名称語である場合に限られるので、たとえば時間的・空間的な位置を表さない dakṣiṇā ime gāthakāḥ「この歌い手たちは有能である」や、名称語として使われている uttarāḥ kuravaḥ「ウッタラ地域のクルたち」の場合には *dakṣiṇe, *uttare は許されない。

【規則】

1.1.35 svam ajñātidhanākhyāyām ||

/sva.NOM.SG a-jñāti-dhana-ākhyā.LOC.SG/

「主格複数語尾 Jas が後続する場合、sva『自分の』は任意に〈sarvanāman 代名詞〉と呼ばれる、それが『親族』または『財産』を表す場合を除いて。」

【略説】

主格複数語尾 Jas が後続する場合、sva「自分の」という語に〈sarvanāman 代名詞〉という術語が付与される。これによって、同語の主格複数形は通常の名詞変化のものでも代名詞変化のものでも許されることになる。ただし、この sva という語が「親族」あるいは「財産」という意

味で使われている場合、同語に〈sarvanāman 代名詞〉という術語の付与はなされず、したがってその主格複数形としては名詞変化のもののみが許される。

【例】

1.1.35 によって、sva「自分の」に主格複数語尾 Jas（4.1.2）が導入された svāḥ putrāḥ「自分の息子たち」（名詞変化）も、あるいは Jas に接辞 Śī（7.1.17）が代置された sve putrāḥ（代名詞変化）も許される。ただ、複数形 svāḥ が「親族」を意味する場合、あるいは prabhūtāḥ svā na dīyante「多くの財産は与えられない」のように「財産」を意味する場合には *sve は許されない。

【規則】

1.1.36 antaram bahiryogopasaṃvyānayoḥ ‖

/antara.NOM.SG bahiryoga-upasaṃvyāna.LOC.DU/

「主格複数語尾 Jas が後続し、かつ『外の』または『下着』を表す場合、antara は任意に〈sarvanāman 代名詞〉と呼ばれる。」

【略説】

主格複数語尾 Jas が後続する場合、「外の」または「下着」を意味する antara という語に〈sarvanāman 代名詞〉という術語が付与される。これによって、同語の主格複数形は通常の名詞変化のものでも代名詞変化のものでも許されることになる。

【例】

antare gṛhāḥ ~ antarāḥ gṛhāḥ「郊外の家（主格複数）」、antare śāṭakāḥ ~ antarāḥ śāṭakāḥ「内側に着る衣（主格複数）」。これらの例では antara はそれぞれ「外の」と「下着（＝内側に着るもの）」を表すので、主格複数語尾 Jas（4.1.2）が導入された antarāḥ（名詞変化）も、Jas に接辞 Śī（7.1.17）が代置された antare（代名詞変化）も許されている。

【規則】

1.1.37 svarādinipātam avyayam ‖

/svarādi-nipāta.NOM.SG avyaya.NOM.SG/

「svar『太陽』等の項目および小辞は〈avyaya 不変化詞〉と呼ばれる。」

【略説】

ここで言われる svar 群は『名詞語基表』第 254 番目の語群（GP 254）に、小辞（nipāta）は 1.4.56–97 に列挙される。これら svar 群の項目と小辞はいずれも〈avyaya 不変化詞〉と呼ばれることが規定されている。svar 群の項目には現代の用語で副詞に該当するものが含まれているが、パーニニ文法では「副詞」という範疇は用いられていない。後のインド文法家たちは「行為の限定要素」（kriyāviśeṣaṇa）という名のもとで副詞について議論を展開している。

【例】

svar 群は、svar「太陽」、antar「内側に」、prātar「早朝に」など、数多くの不変化詞を含む。小辞は 1.4.56–97 に挙げられているものを指し、ca「また」、vā「あるいは」、ha「実に」などの不変化詞を含む。

【規則】

1.1.38 taddhitaś cāsarvavibhaktiḥ ||

/taddhita.NOM.SG ca a-sarva-vibhakti.NOM.SG/

「第 2 次接辞で終わる語も〈avyaya 不変化詞〉と呼ばれる、その語がすべての格語尾をとるのでないのであれば。」

【略説】

「第 2 次接辞」（taddhita「それに資する接辞、タッディタ接辞」）とは、4.1.76–5.4.160 に規定される接辞を指す。それらの接辞で終わる語が〈avyaya 不変化詞〉と呼ばれることを規定している。ただし、第 1 格語尾（主格語尾）から第 7 格語尾（所格語尾）までのすべての格語尾をとることができる語は、それが第 2 次接辞で終わる語であっても、〈avyaya 不変化詞〉とは呼ばれない。

【例】

不変化詞である tataḥ「そこから」は、第 5 格語尾（奪格語尾）で終わる形式（tad + Ṅasi̱/bhyām/bhyas）に第 2 次接辞 tasi̱L を付与することで形成される（5.3.7, 2.4.71）。すべての格語尾ではなくて第 5 格語尾のみをとっていることから不変化詞と見なされる。一方、aupagava「ウパグの子孫」という語は、第 2 次接辞 aṆ で終わる語であるが（4.1.92）、この語には第 1 格語尾（主格語尾）から第 7 格語尾（所格語尾）まですべての格語尾が導入可能であるから、不変化詞とは見なされない。

【規則】

1.1.39 kṛn mejantaḥ ||

/kṛt.NOM.SG m-eC-anta.NOM.SG/

「第 1 次接辞で終わる語も〈avyaya 不変化詞〉と呼ばれる、その接辞が子音 -m または母音 eC（e, o, ai, au）で終わるものであれば。」

【略説】

「第 1 次接辞」（kṛt「つくる接辞、クリト接辞」）とは、3.1.91 の支配下規則によって、動詞語根の後に導入される接辞のうち、動詞語尾を除いた接辞を指す（3.1.93）。これら第 1 次接辞が導入されて派生する項目のうち、-m で終わる接辞が導入されて派生する項目、または eC が指示する母音（e, o, ai, au）で終わる接辞が導入されて派生する項目が〈不変化詞〉と呼ばれることを規定している。たとえば tum や -tavai がこの種の接辞に含まれており、これらの導入に

よって派生されるのは不定詞（infinitive）や絶対分詞（absolutive/gerund）である。

【例】

svāduṅkāram bhuṅkte「彼は（食べ物を）甘くしてから食べる」における ˚kāram は、kṛÑ「する」に -m で終わる第 1 次接辞 ṆamuL を付与することで派生される（3.4.26）。また、krátve dákṣāya jīváse「力と能力と生命のために」（ṚV 10.57.4b）における jīváse は jīv「生きる」に -e で終わる第 1 次接辞 -ase を付与することで派生される（3.4.9）。これらの語は 1.1.39 によって〈avyaya 不変化詞〉と呼ばれる。

【規則】

1.1.40 ktvātosunkasunaḥ ‖

/Ktvā-tosuN-KasuN.NOM.PL/

「接辞 Ktvā, tosuN, KasuN で終わる語は〈avyaya 不変化詞〉と呼ばれる。」

【略説】

これら 3 つの接辞で終わる語も〈avyaya 不変化詞〉と呼ばれることを規定している。これらの接辞によって派生されるのは不定詞（infinitive）や絶対分詞（absolutive/gerund）である。

【例】

kṛtvā「〔何かを〕してから」は接辞 Ktvā によって派生される（3.4.18–24）。vyuṣṭāyām purā sūryasyodetor ādheyaḥ「〔夜が〕明けた時、太陽が昇る前に、〔火は〕置かれるべきである」（KS 8.3）における udetoḥ では、ud-i「昇る」に接辞 tosuN が付与されている（3.4.16）。purā́ jatrúbhya ātṛ́daḥ「鎖骨を穿つ前に」（ṚV 8.1.12b）における ātṛ́daḥ では、ā-tṛd「穿つ」に接辞 KasuN が付与されている（3.4.17）。これらの語は〈avyaya 不変化詞〉と呼ばれる。

【規則】

1.1.41 avyayībhāvaś ca ‖

/avyayībhāva.NOM.SG ca/

「不変化複合語も〈avyaya 不変化詞〉と呼ばれる。」

【略説】

不変化複合語（avyayībhāva）は 2.1.5–21 にて規定される複合語の一種である。そのような複合語が〈avyaya 不変化詞〉と呼ばれることを規定している。

【例】

upāgni śalabhāḥ patanti「蛾たちは火のそばへ飛んでいく」における不変化複合語 upāgni は主格複数形 śalabhāḥ を修飾しているが、〈avyaya 不変化詞〉と呼ばれることからその格語尾にゼロが代置されている（2.4.82）。また、múkha「顔」がバフブリーヒ複合語の後部要素に現れる場合、通常最終音節に高アクセントが置かれるが（6.2.127）、upāgnímukhaḥ「火の方へ顔を向け

た〔もの〕、火の近くに顔がある〔もの〕」のように、前部要素が不変化詞である場合、前部要素の最終音節に高アクセントが置かれる（6.2.128）。さらに、upapayaḥkāraḥ「乳の近くで〔何かを〕する〔もの〕（？）」は、不変化複合語 upapayaḥ を含むことから *upapayaskāraḥ とはならない（8.3.46）。

【規則】

1.1.42 śi sarvanāmasthānam ||

/Śi.NOM.SG sarvanāmasthāna.NOM.SG/

「中性主格・対格複数語尾 Śi は〈sarvanāmasthāna 強語幹格語尾〉と呼ばれる。」

【略説】

当該規則に出る Śi は、中性主格複数語尾 Jas と中性対格複数語尾 Śas に対する代置要素である（7.1.20）。そのような Śi が〈sarvanāmasthāna 強語幹格語尾〉（「完全な名詞〔語幹〕（＝強語幹）に場を占める〔語尾〕（？）」）と呼ばれることを規定している。これにより、中性の名詞が格変化をするとき、その主格複数形と対格複数形は強語幹で現れることが確保される。

Śi の Ś は指標辞であり、この代置要素が中性主格複数語尾 Jas と中性対格複数語尾 Śas の全体に代置されることを示す（1.1.55）。

【例】

kuṇḍāni tiṣṭhanti「水瓶がある」と kuṇḍāni paśya「水瓶を見よ！」は、中性名詞 kuṇḍa「水瓶、穴」の主格・対格複数形 kuṇḍāni を示している。中性において、主格複数語尾 Jas と対格複数語尾 Śas（4.1.2）に Śi が代置される（7.1.20）。Śi に〈sarvanāmasthāna 強語幹格語尾〉という術語を与えることによって、加音 nuM の導入（7.1.72）や、次末母音に対する長母音の代置（6.4.8）が可能となる。

【規則】

1.1.43 suṭ anapuṃsakasya ||

/sUṬ.NOM.SG a-napuṃsaka.GEN.SG/

「主格・対格語尾 sUṬ（sU, au, Jas, am, auṬ）は〈sarvanāmasthāna 強語幹格語尾〉と呼ばれる、それらが中性の語に付与される場合を除いて。」

【略説】

主格単数語尾 sU、主格双数語尾 au、主格複数語尾 Jas、対格単数語尾 am、対格双数語尾 auṬ というこれら 5 つの格語尾に〈sarvanāmasthāna 強語幹格語尾〉という術語が与えられている。これにより、これら 5 つの格語尾が後続する場合に名詞形が強語幹で現れることが確保される。しかし、当該の格変化をする名詞が中性名詞である場合には、この術語適用はなされない。その結果、これらの格語尾が後続する中性名詞の派生形には弱語幹が現れることになる。ただし、直前の 1.1.42 によって、中性主格複数形には強語幹が現れる。

【例】

rājan「王」の主格単数・双数・複数形 rājā, rājānau, rājānaḥ と、対格単数・双数形 rājānam, rājānau は sUṬ によって指示される語尾で終わるものである。これらの語尾に〈sarvanāmasthāna 強語幹格語尾〉という術語が与えられることによって、次末母音への長母音の代置（6.4.8）が可能となる。sUṬ に対格複数語尾は含まれないことから、たとえば rājñaḥ paśya「王たちを見よ！」のように *rājānaḥ とはならない。また、たとえば中性である veman「織機」の主格・対格双数形は vemanī となる。これらの語尾には〈sarvanāmasthāna 強語幹格語尾〉という術語が与えられないので、*vemānī とはならない。

【規則】

1.1.44 na veti vibhāṣā ||

/na vā iti vibhāṣā.NOM.SG/

「『あるいはそうでない』という意味は〈vibhāṣā 任意〉と呼ばれる。」

【略説】

パーニニが規則中で述べる「任意性」（vibhāṣā）には、複数種のものがある。当該規則で規定される「任意性」は、そのうちの 1 つ「得られている〔操作〕と得られていない〔操作〕に対する任意性、両者に対する任意性」（prāptāprāptavibhāṣā, ubhayatravibhāṣā）であると伝統的には解釈されている。これは、特定の文法操作の適用が、ある場合には任意に禁止され、ある場合には任意に許されることを示す任意性である。

【例】

『カーシカー注解』は語根 śvi「膨らむ」の完了形の異形態 śuśāva ~ śiśvāya（3 人称単数）および śuśuvatuḥ ~ śiśviyatuḥ（3 人称双数）を「両者に対する任意性」（ubhayatravibhāṣā）の例として挙げる。指標辞 K を含む接辞が後続する場合、語根 śvi に〈samprasāraṇa 引き伸ばし〉が適用され（6.1.15）、その結果 śu という形になる（6.1.108）。また 1.2.5 の規定によって、指標辞 P を含まない完了語尾は K を指標辞とするものと見なされる。完了形 3 人称単数語尾（tiP > ṆaL）は P を含むが、3 人称双数語尾（tas > atus）は P を含まない（3.4.82）ので、後者にのみ 1.2.5 が適用される。その結果、〈samprasāraṇa 引き伸ばし〉が適用されていない śiśvāya と、〈samprasāraṇa 引き伸ばし〉が適用された śuśuvatuḥ のみが派生されてしまう。このような事態に対して、6.1.30 が規定する śvi への〈samprasāraṇa 引き伸ばし〉適用の任意性により、〈samprasāraṇa 引き伸ばし〉の適用が任意に許された語形として śuśāva が、〈samprasāraṇa 引き伸ばし〉の適用が任意に禁止された語形として śiśviyatuḥ がそれぞれ派生可能となる。前者では得られていない文法操作（aprāpta）の適用が任意に許されており、後者では得られている文法操作（prāpta）の適用が任意に禁じられている。

【規則】

1.1.45 ig yaṇaḥ samprasāraṇam ||

/iK.NOM.SG yaṆ.GEN.SG samprasāraṇa.NOM.SG/

「半母音 yaṆ（y, v, r, l）に母音 iK（i, u, ṛ, ḷ）が代置される操作（あるいはその代置される母音）は〈samprasāraṇa 引き伸ばし〉と呼ばれる。」

【略説】

y, v, r, l という半母音に対して、最も音価が近いと見なされる短母音 i, u, ṛ, ḷ が代置される操作自体が〈samprasāraṇa 引き伸ばし〉という術語で呼ばれること、あるいは y, v, r, l という半母音に対して代置されるこれら i, u, ṛ, ḷ という短母音が〈samprasāraṇa 引き伸ばし〉という術語で呼ばれることを規定している。

y, v, r, l という半母音に対して i, u, ṛ, ḷ という短母音は発声時間が長いものであり、インド音声学では、短母音の発音に要する時間単位（mātrā）は子音（半母音を含む）の発音に要する時間単位の倍とされる。このような母音の性質は i, u, ṛ, ḷ に付与される〈samprasāraṇa 引き伸ばし〉という術語の意味に適合する。

短縮記号 yaṆ が指示する y, v, r, l という半母音に対して、短縮記号 iK が指示する短母音 i, u, ṛ, ḷ がそれぞれ順番通りに対応することは 1.3.10 による。

【例】

yaj「祭る」→ iṣṭam「祭られた」、vap「撒く」→ uptam「撒かれた」、grah「捕える」→ gṛhītam「捕えられた」のように、これらの語根に過去受動分詞接辞 Kta が付与される場合、y, v, r という半母音に対して i, u, ṛ という引き伸ばし音が代置される（6.1.15, 6.1.108）。

【規則】

1.1.46 ādyantau ṭakitau ||

/ādi-anta.NOM.DU Ṭa-K-it.NOM.DU/

「指標辞 Ṭ を有する要素は該当する要素の前に、指標辞 K を有する要素は該当する要素の後に付加される。」

【略説】

パーニニ文典では、接辞（pratyaya）の導入に加えて加音（āgama）の付加が規定されており、付加される加音には指標辞が付されている。当該規則は、指標辞 Ṭ をもつ加音は付加される要素の先頭要素（ādi）となり、指標辞 K を持つ加音は付加される要素の最終要素（anta）となることを規定している。言い換えると、前者の加音は他の要素の前に付加され、後者の加音は他の要素の後に付加されるということである。当該規則により、それぞれの加音が生ずる位置が特定されている。

【例】

複合未来形 lavitā「彼は刈るであろう」は、アールダダートゥカ接辞 tāsi の導入によって形成さ

れる（3.3.15, 3.1.33）。このアールダダートゥカ接辞に加音 iṬ が付加されるとき（7.2.35）、iṬ は指標辞 Ṭ をもつことから接辞の前に付加される。また muṇḍo bhīṣayate「頭を剃った人は〔誰かを〕怖れさせる」における bhīṣayate は、語根 bhī 「怖れる」 + 加音 ṣuK で形成されており（7.3.40）、ṣuK は指標辞 K をもつことから語根の後に付加される。

【規則】

1.1.47 mid aco ’ntyāt paraḥ ||

/M-it.NOM.SG aC.GEN.SG antya.ABL.SG para.NOM.SG/

「指標辞 M を有する要素は、該当する要素の最終母音の後に付加される。」

【略説】

当該規則は、1.1.46 と同様、加音が生ずる場所を特定するための規則である。指標辞 M を持つ加音が付加される場合、それは付加される要素が持つ母音のうち最後の母音の後に付加されることを規定している。

【例】

muñcati「彼は解放する」のように、語根 muc「解放する」の現在形では、加音 nuM が付加される（7.1.59）。この加音は指標辞 M をもつことから muc の最終母音である -u- の後に付加される。結果、mu-ñ-c となる。

【規則】

1.1.48 eca ig ghrasvādeśe ||

/eC.GEN.SG iK.NOM.SG hrasva-ādeśa.LOC.SG/

「母音 eC（e, o, ai, au）に短母音が代置される場合、その短母音は iK（i, u, ṛ, ḷ）である。」

【略説】

eC が指示する e, o, ai, au に短母音が代置される場合、短母音としては iK が指示する i, u, ṛ, ḷ が選ばれることを規定している。短縮記号 iK は ṛ, ḷ という短母音も含むが、それらが e, o, ai, au に対して代置されることはなく、実質、短母音として代置されるのは i, u のみである。すなわち、e と ai に対しては i が、o と au に対しては u が代置要素として選択される。この選択を可能とするのは、1.1.50 である。

1.1.50 は、代置操作が行われる場合、代置されるものに最も近い音が代置要素として選ばれることを規定している。iK が指示する i, u, ṛ, ḷ のうち、e と ai に最も近い音は i、o と au に最も近い音は u である。これは調音位置（sthāna）の点から見た音の近さである。代置要素としての短母音を iK が指示するものに絞る当該規則により、e, o, ai, au に対して短母音 a が代置される可能性が排除される。

【例】

atiri「〔通常の〕財産〔の量〕を超えた〔一族 =kula〕（＝非常に裕福な一族）」は、ati「超え

て」+rai（rayi）「財産」によるタトプルシャ複合語（2.2.18）である。中性形では rai の母音 ai に短母音 i が代置される（1.2.47）。また upagu「牛のそばに」は、upa「そばに」+go「牛」による中性の不変化複合語（2.1.6, 2.4.18）で、複合語の形成過程において -o に短母音 -u が代置される（1.2.47）。

【規則】

1.1.49 ṣaṣṭhī sthāneyogā ||

/ṣaṣṭhī.NOM.SG sthāne-yogā.NOM.SG/

「第 6 格語尾は『x の所に y（x の代わりに y）』という関係を表示する。」

【略説】

当該規則は、文法規則において第 6 格語尾（属格語尾）で終わる属格形が用いられる場合、その第 6 格語尾は「x の代わりに y」という代置関係を示すことを規定している。第 6 格語尾が表示しうる関係（sambandha）には多くの種類があるが、それが代置関係のみに絞られている。

規則において属格形で示される項目が代置されることになる項目、すなわち原要素（sthānin）であり、主格形で示される項目が代置する項目、すなわち代置要素（ādeśa）である。

【例】

アールダダートゥカ接辞が後続する場合、2.4.52 によって、語根 as「存在する」に bhū「なる、生ずる」が代置される。2.4.52 における asteḥ（asti の属格形）の第 6 格語尾は、1.1.49 により「x の代わりに y」という代置関係を表示する。これによって、アールダダートゥカ接辞を含む形式 bhavitā（複合未来）、bhavitum（不定詞）、bhavitavyam（未来受動分詞）では語根 bhū が as に代置されている。

【規則】

1.1.50 sthāne ’ntaratamaḥ ||

/sthāna.LOC.SG antaratama.NOM.SG/

「代置要素のうち、原要素に最も近いものが選ばれる。」

【略説】

当該規則は、音の代置操作が行われる場合、原要素に最も近い音が代置要素として選ばれることを規定している。この規定により、代置要素に複数の可能性がある場合に適切な代置要素が選ばれることが保証される。『カーシカー注解』によれば、原要素と代置要素間の「近さ」を決める観点には音の調音位置（sthāna）、語の意味（artha）、音の性質（guṇa）、音の発声時間（pramāṇa）の 4 つがある（KV on A 1.1.50 [I.21]）。

【例】

pākaḥ「煮ること」は、語根 pac「煮る」+ 動作名詞を派生する接辞 GHaÑ（3.3.18）によって形成されている。指標辞 GH をもつ接辞が後続する場合、7.3.52 により、語根末の子音 c および j

に kU（k, kh, g, gh, ṅ）［1.1.69］が代置される。pac の c は無声無気音であるので、kU に含まれる子音の中から同じ無声無気音である k が代置要素として選ばれる。これは音の性質（guṇa）の点で最も近い音が選ばれている例である。

【規則】

1.1.51 ur aṇ raparaḥ ||

/ṛ̥.GEN.SG aṆ.NOM.SG ra̲-para.NOM.SG/

「母音 ṛ̥, ṝ̥ に代置される aṆ（a, ā, i, ī, u, ū）には r が後続する。」

【略説】

規則中の ur は ṛ̥ という語の属格単数形であり、短母音 ṛ̥ 及びそれと同類音である母音、たとえば長母音 ṝ̥ を指示する（1.1.69）。当該規則は、これら ṛ̥ や ṝ̥ に対して、短縮記号 aṆ が指示する母音 a, ā, i, ī, u, ū が代置されるとき、それらの母音には r 音が付加されることを規定している。

伝統的には、当該規則は、母音 ḷ̥ に対してたとえば母音 a が代置されるときにその母音には子音 l が後続することをも規定するものと見なされている。この伝統的な解釈には 2 つの前提がある。1 つは、規則中の raparaḥ における ra が、「r 音」を意味する ra ではなく、r 音と l 音を指示する略字 rÃ（Ã は鼻母音としての指標辞で『音素表』において l の後に付されていると解釈される）と見なされることである。もう 1 つは、短母音 ṛ̥ と ḷ̥ が同類音と見なされ（vt. 5 on A 1.1.9）、規則中の ur という表現によって短母音 ṛ̥ と同類音である ḷ̥ も指示されるということである。これらにより、母音 ṛ̥, ṝ̥ にたとえば a が代置されるときには a に r が後続し、母音 ḷ̥ に a が代置されるときには a に l が後続するという規定内容が得られる（1.3.10）。

【例】

複合未来形 kartā「彼は〔何かを〕するであろう」は、語根 kṛ̥「する」+ アールダダートゥカ接辞 tāsi̲ で形成される（3.3.15, 3.1.33）。アールダダートゥカ接辞が後続する場合、7.3.84 によって kṛ̥ の ṛ̥ にグナ母音 a が代置される。1.1.51 により、この代置要素 a に子音 r が付随する（kar）。また、現在形 kirati「彼は撒く」のように、語根 kṝ̥「撒く」の ṝ̥ に母音 i が代置される場合にも（7.1.100）、代置要素 i に子音 r が付随する（kir）。

【規則】

1.1.52 alo ’ntyasya ||

/aL.GEN.SG antya.GEN.SG/

「代置要素は、該当する要素の最終音に代置される。」

【略説】

代置操作が行われるときの一般原則を規定している。x が y に代置されるとき、x は y の最終音に対して代置される。これがパーニニ文法における代置操作の基本となる。

【例】

1.2.50 は「goṇī（容積の単位）に i が代置される、後続する第 2 次接辞にゼロが代置される場合」という内容を規定する規則であるが、1.1.52 の適用によって goṇī の最終音である -ī にのみ -i が代置される。結果、数詞限定複合語（dvigu）である pañcagoṇiḥ「5 ゴーニーで購入された〔もの〕」（5.1.28, 37, 19）のように、最終母音は -ī ではなく -i として現れる。

【規則】

1.1.53 ṅic ca ‖

/Ṅ-it.NOM.SG ca/

「指標辞 Ṅ を有する代置要素も、該当する要素の最終音に代置される。」

【略説】

代置要素が何らかの要素の最終音に取ってかわることは 1.1.52 によって確立している。それにもかかわらず、指標辞 Ṅ をもつ代置要素の場合には代置操作が該当する要素の最終音に対して行われることを述べるのは、1.1.55 に対する例外について規定するためである。1.1.55 によれば、代置要素が 2 つ以上の音から構成される場合、代置操作は該当する要素の全体に対して行われる。それに対して当該規則 1.1.53 は、代置要素が 2 音以上から構成される場合であってもそれが指標辞 Ṅ をもつ代置要素ならば、代置操作は該当する要素の最終音に対してなされることを確保する。

【例】

mātāpitarau「母と父」は、mātṛ「母」+ pitṛ「父」からなるドゥヴァンドゥヴァ複合語である。6.3.25 により、mātṛ に ānaṄ（> ā 8.2.7）が代置される。ānaṄ は 2 つ以上の音（すなわち ān）からなる代置要素であるが、mātṛ 全体に代置される（1.1.55）のではなく、最終音である ṛ に代置される。ānaṄ は指標辞 Ṅ を有するからである。

【規則】

1.1.54 ādeḥ parasya ‖

/ādi.GEN.SG para.GEN.SG/

「代置要素は、該当する要素が他の要素に後続する場合、その初頭音に代置される。」

【略説】

ある環境では、代置要素が該当する要素の初頭音に取ってかわることが規定されている。その環境とは、代置されることになる要素、すなわち原要素が何らかの要素に後続している場合である。

【例】

āsīno yajate「彼は座ったまま祭式を行う」における āsīnaḥ は、語根 ās「座っている」+ 中動現

在分詞接辞 -āna- で形成される。7.2.83 は「語根 ās『座っている』に後続する場合、接辞 -āna- に ī が代置される」ことを規定する規則であるが、1.1.54 の適用によって -āna- の初頭音に ī が代置される。

【規則】

1.1.55 anekāl śit sarvasya ||

/aneka-aL.NOM.SG Ś-it.NOM.SG sarva.GEN.SG/

「2 つ以上の音からなる代置要素、または指標辞 Ś を有する代置要素は、該当する要素全体に代置される。」

【略説】

代置操作が行われるとき、もし代置要素が 2 つ以上の音から構成されるならば、あるいは代置要素が指標辞 Ś を持つならば、代置操作は原要素となる要素の全体に対してなされることが規定されている。

【例】

アールダダートゥカ接辞が後続する場合、2.4.52 の規定によって、語根 as「存在する」に bhū「なる、生ずる」が代置される。この場合、代置要素である bhū は 2 つ以上の音（bh と ū）からなるので、1.1.55 によって as という要素全体に代置される。結果、アールダダートゥカ接辞を含み、as 全体に代置がなされた形式 bhavitā（複合未来）、bhavitum（不定詞）、bhavitavyam（未来受動分詞）が派生される。

【規則】

1.1.56 sthānivad ādeśo ’nalvidhau ||

/sthāni-vat ādeśa.NOM.SG an-aL-vidhi.LOC.SG/

「代置要素は原要素として扱われる､原要素の音を根拠とする操作が行われる場合を除いて。」

【略説】

ある本来の要素に何らかの要素が代置されたとき、一般にその代置要素は本来の原要素として扱われることを規定している[31]。代置要素が本来の原要素として見なされることで、特定の文法操作の適用が可能となり（以下の例では 6.1.71 の適用）、望ましい語形の派生が導かれる。ただし、どのような場合でも代置要素が原要素と見なされるわけではない。すなわち、その原要素の音を根拠とする文法操作がなされる場合には（以下の例では 6.1.68 が規定する操作がなされる場合）、原要素を代置要素として扱うことは許されない。別の言い方をすれば、代置要

[31]『カーシカー注解』によれば、代置要素には 1. 動詞語基（dhātu）に対する代置要素、2. 語基（aṅga）に対する代置要素、3. 第 1 次接辞（kṛt）に対する代置要素、4. 第 2 次接辞（taddhita）に対する代置要素、5. 不変化詞（avyaya）に対する代置要素、6. 名詞格語尾（sUP）に対する代置要素、7. 動詞人称語尾（tiṄ）に対する代置要素、8. 完全屈折形（pada）に対する代置要素の 8 つがある（KV on A 1.1.56 [I.22–23]）。

素は原要素の性質を受け継ぐ一方で、原要素の音自体の性質は受け継がないことが規定されていることになる。

当該規則の前半部は、一般に代置要素は常に原要素として扱われていることを述べている。したがって、一般的に言って代置要素というものは、文法操作に対して、操作環境を供給する関係（feeding relationship）や操作環境を奪う関係（bleeding relationship）を有さないことを規定していることになる。ただし、当該規則の後半部は、原要素の音を根拠とする文法操作が行われる場合には、代置要素は代置要素のまま残ることを教えているから、このような操作が行われる場合には、代置要素は、他の文法操作に対して、操作環境を奪う関係（bleeding relationship）を有することが述べられていることになる。たとえば以下の dyauḥ の例では、7.1.84 適用の結果である代置要素 au（v > au）は、原要素とは見なされないことによって、6.1.68 が規定する操作の環境（s > Ø / v__）を奪っている。

【例】

絶対分詞 prakṛtya「成し遂げてから」の派生過程において、接辞 Ktvā（3.4.21）に LyaP が代置される（7.1.37）：pra-kṛ-Ktvā > pra-kṛ-LyaP. 次に 6.1.71 が適用されることによって、kṛ の後に加音 tuK が導入される：pra-kṛ-tuK-LyaP（> prakṛtya）。6.1.71 の適用条件の 1 つは第 1 次接辞（kṛt 接辞）が後続していることである。原要素 Ktvā は第 1 次接辞であり（3.1.93）、1.1.56 によってその代置要素 LyaP をこの第 1 次接辞 Ktvā として扱うことが可能となる。一方、dyauḥ「天」の場合のように、代置要素が原要素として扱われない場合もある。この例では、主格単数語尾 -s が後続するとき div の v に au が代置されている（7.1.84）：div-s > diau-s（> dyauḥ）。ここで、もし代置要素 au が原要素 v として扱われるならば、子音直後の s のゼロ化を規定する 6.1.68 が適用されることになってしまう：*dyau-Ø. このような事態を防ぐため、analvidhau「原要素の音を根拠とする操作が行われる場合を除いて」という条件が付されている。

【規則】

1.1.57 acaḥ parasmin pūrvavidhau ||

/aC.GEN.SG para.LOC.SG pūrva-vidhi.LOC.SG/

「後続する要素を条件として代置要素が母音に取って代わるとき、代置要素は原要素として扱われる、代置要素に先行する要素を対象とする操作が行われる場合において。」

【略説】

1.1.56 によっては代置要素を原要素として扱うことができないような環境下で、一定の条件のもと代置要素を原要素として扱うことを規定している。それによって望ましい語形が導かれる。一定の条件とは、1. ある後続要素を根拠に代置要素が母音に代置されていること（以下の例では vadhØ における Ø がそのような代置要素）、2. その代置要素に先行する要素に対する操作が行われるときであること（以下の例では 7.2.3 の適用時）、である。

当該規則は、上述のような文法操作の際に原要素たる母音として扱われることになる代置要

素が、その操作に対して、操作環境を供給する関係（feeding relationship）を有さないことを述べている。つまり、母音への要素の代置を規定する規則は、上述のような文法操作を規定する後続規則と連絡しない。

【例】

アオリスト avadhīt「彼は殺した」の派生過程において、語根 han「殺す」に vadha が代置される（2.4.43）。アールダダートゥカ接辞が後続する場合（ここではアオリスト接辞 si̲C［3.1.44］）、加音 iṬ が導入され（7.2.35）、6.4.48 によって vadha の最終母音にゼロが代置される：vadha-iṬ-si̲C- > vadhØ-iṬ-si̲C-. ここで、後続する要素である si̲C を条件として代置要素 Ø が母音 a に取って代わっている。次に、代置要素に先行する要素を対象とする操作を規定する 7.2.7、すなわち「CaC（C = 子音）の形をした語根に加音 iṬ が後続する場合、語根母音 a にヴリッディ母音 ā が任意に代置される」が適用されるとき、代置要素 Ø は原要素 a として扱われる。つまり、vadhØ が本来の vadha- として見なされることによって、7.2.7 の適用条件の 1 つである「語根が子音で終わること」が満たされず、ヴリッディ化した *avādhīt の派生が防がれる。

【規則】

1.1.58 na padāntadvirvacanavareyalopasvarasavarṇānusvāradīrghajaścarvidhiṣu ||

/na padānta-dvirvacana-vareya̲lopa-svara-savarṇa-anusvāra-dīrgha-ja̲Ś-ca̲R-vidhi.LOC.PL/

「後続する要素を条件として代置要素が母音に取って代わるとき、代置要素は原要素として扱われない、代置要素に先行する要素を対象とする次の操作が行われる場合、すなわち語の末要素、重子音化、接辞 vara に先行する y のゼロ化、アクセント、同類音、出わたり鼻音（anusvāra）、長母音、子音 ja̲Ś（j, b, g, ḍ, d）、子音 ca̲R（c, ṭ, t, k, p, ś, ṣ, s）に関する操作が行われる場合において。」

【略説】

1.1.57 で規定された条件を満たすことにより代置要素が原要素として扱われてしまうと、望ましい語形が得られない場合がある。そのような事態を防ぐために、1.1.57 で規定された条件を満たすとしても、一定の条件下では代置要素は原要素と見なされないことを当該規則は規定している。その条件には 8 つある。すなわち、1. 語の末要素に関する操作が行われる場合、2. 重子音化に関する操作が行われる場合、3. 接辞 vara に先行する y のゼロ化に関する操作が行われる場合[32]、4. アクセントに関する操作が行われる場合、5. 同類音に関する操作が行われる場

[32] 1.1.58 の伝統的な解釈は vareya̲lopa を、vare「接辞 vara に先行する要素」と ya̲lopa「y のゼロ化」に分ける（Cardona 1997: 64）。ya̲lopa の例として『カーシカー注解』は kaṇḍūtiḥ「掻くこと」を挙げている。『カーシカー注解』によると、この語は名詞派生動詞 kaṇḍūyati「彼は掻く」から次のように派生される。名詞派生動詞語基 kaṇḍūya-に接辞 ti（KtiN）が付与され（3.3.94）、次に 6.4.48 の適用によって語基末の a がゼロ化される：kaṇḍūya-ti- > kaṇḍūyØ-ti-. 1.1.57 によってこの kaṇḍūyØ-が kaṇḍūya-として扱われることは 1.1.58 によって防がれるので、子音の前の y のゼロ化を規定する 6.1.66 が適用される：kaṇḍūyØ-ti- > kaṇḍūØØ-ti-> kaṇḍūtiḥ（*kaṇḍūytiḥ ではなく）。この理解の仕方と派生の仕方には問題があると思われる。まず、接辞 ti は一般に非派生の動詞語基に付与されるものである（3.3.94）。一方、kaṇḍūya- のような派生動詞語基の場合、3.3.102 によって接辞 a の付与

合、6. 出わたり鼻音（anusvāra）に関する操作が行われる場合、7. 長母音に関する操作が行われる場合、8. 子音 jaŚ（j, b, g, ḍ, d）に関する操作が行われる場合、9. 子音 caR（c, ṭ, t, k, p, ś, ṣ, s） に関する操作が行われる場合である。

当該規則は、上述のような文法操作の際に原要素とは見なされない代置要素は、その操作に対して、一般に操作環境を供給する関係（feeding relationship）を有するものであることを述べている。つまり、母音への要素の代置を規定する規則は、上述のような文法操作を規定する後続規則と連絡する。以上のことは以下に挙げる 2–9 の例について当てはまる。1 の例の場合、代置要素は、文法操作に対してその環境を奪う関係（bleeding relationship）を有するものである。

【例】

1.1.58 に列挙される操作の例は以下の通りである。

1. 語の末要素（padānta）：kau staḥ「立っている 2 人は誰か？」。語根 as「存在する」の初頭母音にゼロが代置される（6.4.111）：as-tas > Øs-tas（> staḥ）。ここで 1.1.57 によって Øs- が as- として扱われれば、母音が kau に後続することになり、6.1.78 によって kau という語の末要素 au は āv となる。しかし、1.1.58 によって Øs- が as- として扱われることは防がれる。結果として、6.1.78 は適用されず、*kāv staḥ とはならない。

2. 重子音化（dvirvacana）：daddhy atra ~ dadhy atra「ここに発酵乳が〔ある〕」。母音が後続する場合、6.1.77 によって dadhi は dadhy となる。次に、y のような子音の前で重子音化（ここでは ddh）をもたらす規則 8.4.47（任意規則）が適用可能となる。ここで 1.1.57 によって dadhy が dadhi として扱われてしまうと、8.4.47 が適用できず daddhy という語形が得られないことになる。しかし、1.1.58 によって dadhy が dadhi として扱われることは妨げられるため、8.4.47 が適用可能となり、dadhy も daddhy も派生可能となる。

3. 接辞 vara に先行する y のゼロ化（vareyalopa）：yāyāvaraḥ「放浪する者」。語根 yā「行く」の強意形動詞語基 yāyāya- に接辞 vara が付与され（3.2.176）、次に 6.4.48 の適用によって語基末の a がゼロ化される：yāyāya-vara- > yāyāyØ-vara-. 1.1.57 によってこの yāyāyØ- が yāyāya- として扱われることは 1.1.58 によって防がれるので、子音の前の y のゼロ化を規定する 6.1.66 が適用される：yāyāyØ-varaḥ > yāyāØØ-varaḥ > yāyāvaraḥ（*yāyāyvaraḥ とはならない）。

4. アクセント（svara）：cikīrṣakaḥ「〔何かを〕しようとする者」。語根 kṛ「する」の意欲形動詞語基 cikīrṣa- に接辞 ṆvuL（> aka 7.1.1）が付与され（3.1.133）、次に 6.4.48 の適用によって語基末の a がゼロ化される：cikīrṣa-aka- > cikīrṣØ-aka-. ここで、1.1.57 によって代置要素 Ø が

（kaṇḍūyā「掻くこと」）が規定されており、この規定によって接辞 ti の付与は防がれるはずである（Wackernagel 1918: 386–387, AiG II.2: 626–627）。また、vareyalopa を vare と yalopa に分けた場合、padānta から caR までに列挙されている項目の解釈に不統一が生じることになる。つまり、vare を除いて、padānta から caR までは「X〔に関する操作が行われる場合〕」と解釈できるのに対して、vare だけは「X に先行する Y〔に関する操作が行われる場合〕」という解釈をすることになる。以上のような理由から、本訳注では vareyalopa を 2 つに分けず、「接辞 vara に先行する y のゼロ化」と解釈する。

原要素 a と見なされることは 1.1.58 によって防がれるので、接辞 aka の前の音節に高アクセント（udātta）の付与を規定する 6.1.193 が適用されて、cikīrṣØ-aka-s > cikīrṣakaḥ となる（*cikīrṣá-aka-s > *cikīrṣákaḥ ではなく）。

5. 同類音（savarṇa）：piṇḍhi「挽け！」。語根 piṣ「挽く」の現在形動詞語基 pi-na-ṣ-（3.1.78）に 2 人称単数命令語尾 -dhi が後続する場合、6.4.111 の規定によって接辞 na の a にゼロが代置される：pi-na-ṣ-dhi > pi-nØ-ṣ-dhi（> pi-ṃ-ḍhi 8.3.24, 8.4.53, 8.4.65）。鼻音に対して後続する子音の同類音代置を規定する 8.4.58 が適用されるとき、1.1.57 によって接辞 nØ が na と見なされることは 1.1.58 により防がれるので、8.4.58 が問題なく適用される。その結果、後続する子音 ḍhi と同類の鼻音 ṇ が得られる。

6. 出わたり鼻音（anusvāra）：piṃṣanti「彼らは挽く」。語根 piṣ「挽く」の現在形動詞語基 pi-na-ṣ-（3.1.78）に 3 人称複数語尾 -anti が後続する場合、6.4.111 の規定によって接辞 na の a にゼロが代置される：pi-na-ṣ-anti > pi-nØ-ṣ-anti. 1.1.57 によって pi-nØ-ṣ-anti が pi-na-ṣ-anti として扱われることは 1.1.58 によって防がれるので、子音の前の n に対して出わたり鼻音を代置する 8.3.24 が適用可能となる：pi-nØ-ṣ-anti > piṃṣanti.

7. 長母音（dīrgha）：pratidīvnā「太陽によって（？）」。pratidivan「太陽」に具格語尾 -ā が後続する場合、6.4.134 によって pratidivan- の末音節における a にゼロが代置される：pratidivan-ā > pratidivØn-ā. ここで、div の末子音 v に子音が後続しているので、div の -i- に対する長母音化を規定する 8.2.77 が適用される：pratidivØn-ā > pratidīvnā. 1.1.57 によって pratidivØn- が pratidivan-と見なされることは 1.1.58 によって防がれるので、8.2.77 が適用可能となる。

8. 子音 jaŚ（j, b, g, ḍ, d）：ságdhiḥ「共に食事すること」（sa「共に」＋ghas「食べる」＋-ti-）。ヴェーダ語に関する規定 6.4.100 に従って、sa-ghas-ti- は sa-ghØs-ti- となる。sa-ghØs-ti- は 8.2.26, 40 を経て sa-gh-dhi- となり、この段階で jaŚ に関する操作である gh > g が行われる（8.4.53）。8.4.53 を適用するためには gh に有声子音が後続していなければならない。1.1.57 によって sa-ghØ-dhi- が sa-gha-dhi- として扱われることは 1.1.58 によって防がれるので、8.4.53 が適用可能となる：sa-gh-dhi-s > sa-g-dhi-s > ságdhiḥ.

9. 子音 caR（c, t, ṭ, k, p, ś, ṣ, s）：ákṣan「彼らは食べた」（ghas「食べる」のヴェーダ語におけるアオリスト）。語根 ghas に 3 人称複数語尾 -an が後続する場合、6.4.98 によって ghas は ghØs となる。1.1.57 によって a-ghØs-an が a-ghas-an として扱われることは 1.1.58 によって防がれるので、caR に関する規定「s の前で gh に k が代置される」（8.4.55）が適用され、a-ks-an > ákṣan となる。

【規則】

1.1.59 dvirvacane ’ci ||

/dvirvacana.LOC.SG aC.LOC.SG/

「代置要素が母音に取って代わるとき、重複の操作に関して代置要素は原要素として扱われる、母音で始まりかつ重複を引き起こす接辞が後続する場合において。」

【略説】

何かに代置された代置要素が特定の条件下で原要素と見なされることを規定している。その条件とは、1. 代置要素が母音に取って代わっていること（以下の例では pā の母音 ā にゼロという代置要素が取って代わっている）、2. 音の重複の操作が行われるときであること（以下の例では 6.1.8 の適用時）、3. 母音に取って代わった代置要素の後に母音で始まる接辞が後続すること（以下の例では pØ-atus の -atus がそのような接辞）、4. かつその母音で始まる接辞が重複操作の根拠となる接辞であること（以下の例では pØ-atus の -atus がそのような接辞）、である。

【例】

完了形 papatuḥ「彼ら 2 人が飲んだ」において、語根 pā「飲む」に人称語尾 -atus が後続するとき、語根の ā がゼロ化されている（6.4.64, 1.2.5, 3.4.115）：pā-atus > pØ-atus. 次に 6.1.8 に従って語根の重複操作が行われるが、語根が pØ- と見なされてしまうと、6.1.8 を適用できない。そこで、1.1.59 によって代置要素 Ø が原要素 ā と見なされることによって、重複の操作が可能となる：pā-pØ-atus（6.1.8）> pa-pØ-atus（7.4.59）> papatuḥ.

【規則】

1.1.60 adarśanaṃ lopaḥ ‖

/a-darśana.NOM.SG lopa.NOM.SG/

「現れないことは〈lopa ゼロ〉と呼ばれる。」

【略説】

実際の言語使用の場では知覚されることのない代置要素（ādeśa）、知覚される形では現れることのない代置要素に〈lopa ゼロ〉という術語を与えている[33]。

現代の言語学においてゼロ形態あるいはゼロ交替形という概念はよく知られている。たとえば、sheep「羊」という語は単数形でも複数形でも sheep であるが、複数形 sheep「羊たち」は通常の複数形態素 s の代わりにゼロ交替形をもっていると説明される（sheep + Ø）。

『カーシカー注解』はゼロについて「〔言語項目の〕意味は理解されるが、〔その言語項目が〕使用されていない場合、ゼロがある」と説明している[34]。上の sheep の例で言えば、複数形 sheep からは羊の複数性という意味は理解されるが、その意味を担う s という形態素は認識されないという状況下で、そこにはゼロという交替形が起こっていると考えられることになる。

このように、ゼロという代置要素はゼロ化された原要素が持っていた性質（上の例では複数性の伝達）をそのまま受け継ぐ。この性格は代置要素全般に当てはまる。

---

[33]『カーシカー注解』はパーニニが不知覚（adarśana）と定義したゼロを、1. 不聞（aśravaṇa）、2. 不発声（anuccāraṇa）、3. 非認識（anupalabdhi）、4. 非存在（abhāva）、5. 音素消滅（varṇavināśa）と言い換えている（KV on A 1.1.60 [I.26]）。小川（2014: 54）は 1 と 2 は言語論、3 は認識論、4 と 5 は存在論の観点からゼロを説明したものであると指摘している。1 と 2 のうち、1 は聞き手の点から、2 は話し手の点からゼロをとらえたものである。

[34] Cf. KV on A 8.1.62 (II.899): yatra gamyate cārtho na ca prayujyate tatra lopaḥ.

【例】

jīradānuḥ「活発な贈り物（滴？）をもつ〔もの〕」は、jīv「生きる」+uṇādi（uṆ で始まる接辞群）に含まれる接辞 radānu（3.3.1）で形成される。6.1.66 に従って、jīv の v に子音の前でゼロが代置される：jīv-radānu-s > jīØ-radānu-s > jīradānuḥ.

【規則】

1.1.61 pratyayasya lukślulupaḥ ||

/pratyaya.GEN.SG luk-ślu-lup.NOM.PL/

「接辞に取って代わるゼロは〈luk ルク〉、〈ślu シュル〉、〈lup ルプ〉と呼ばれる。」

【略説】

1.1.60 で規定されたゼロ（lopa）という代置要素は様々な要素に取って代わるものであるが、そのゼロが接辞に取って代わるとき、そのゼロは状況に応じて〈luk ルク〉、〈ślu シュル〉、〈lup ルプ〉という三種の術語で呼ばれることが規定されている。これら三種の術語がそれぞれのどのような状況にあるゼロを指すものであるかについては、以下の例を見よ。

【例】

パーニニ文法では、atti「彼は食べる」の現在語幹は語根 ad「食べる」+ 接辞 ŚaP で形成され、2.4.72 によって ŚaP に luk が代置される。2.4.72 は ad だけでなく、第 2 類の現在語幹を作るすべての語根に適用される規則で、ŚaP すなわち語幹母音 a のゼロ化を規定している。juhoti「彼は〔何かを供物として〕捧げる」は語根 hu「捧げる」+ 接辞 ŚaP で形成され、2.4.75 によって ŚaP に ślu が代置される。第 3 類の現在語幹に特徴的な語根の重複が ślu によって引き起こされる（6.1.10）。varaṇāḥ「ヴァラナ樹の近くにある村（主格複数）」は varaṇa（木の一種）+ 接辞 aṆ で形成され（4.1.83）、4.2.82 によって aṆ に lup が代置される。lup は第 2 次接辞（taddhita）に取って代わるものである。

【規則】

1.1.62 pratyayalope pratyayalakṣaṇam ||

/pratyaya-lopa.LOC.SG pratyaya-lakṣaṇa.NOM.SG/

「接辞がゼロ化されても、その接辞に依拠する操作が行われる。」

【略説】

接辞がゼロ化されて、その接辞が実際には見えなくなっている場合でも、その接辞の存在を根拠とした操作の適用は妨げられないことを規定している。

【例】

agnicit「火〔の祭壇〕を積み重ねる者」や somasut「ソーマを搾る者」では、主格単数語尾 sU にゼロが代置されている（6.1.68）。1.1.62 によって、主格単数語尾 sU がゼロ化されても、接辞 sU の存在に依拠する操作、すなわち名詞格語尾で終わる要素に〈pada 語〉という術語を付与す

る 1.4.14 の操作が適用可能となる。このようにして、agnicit や somasut が〈pada 語〉と呼ばれることが確立する。

【規則】

1.1.63 na lumatāṅgasya ||

/na lumat.INS.SG aṅga.GEN.SG/

「lu を有する要素 （luk, ślu, lup）によって接辞がゼロ化される場合、その語基に関して、接辞に依拠する操作は行われない。」

【略説】

1.1.61 で規定された三種のゼロのいずれかが接辞に代置されて接辞がゼロ化されている場合、この接辞が後続していた語基（aṅga）に対しては、この接辞を根拠とした操作を適用することは許されないことを規定している。

【例】

gārgya「ガルガの孫以降の子孫」は、garga（人名）+ 接辞 yaÑ で派生される父称（patronymic）であるが（4.1.105）、その複数形を派生する場合、接辞 yaÑ のゼロ化（luk）を規定する 2.4.64 が適用され、gargāḥ「ガルガの孫以降の子孫（主格複数形）」となる。通常、指標辞 Ñ をもつ接辞が後続する場合、語基の最初の母音にはヴリッディ音が代置される（7.2.117）：*gārgāḥ. しかし、2.4.64 では接辞 yaÑ は luk によってゼロ化されているので、ここに 1.1.63 が発動し、yaÑ に依拠するヴリッディ代置という操作は語基に対して行われない：gargāḥ.

【規則】

1.1.64 aco ’ntyādi ṭi ||

/aC.GEN.SG antya-ādi.NOM.SG ṭi.NOM.SG/

「ある要素に含まれる母音のうち、最終母音から始まる部分は〈ṭi 韻〉と呼ばれる。」

【略説】

ある言語項目が有する母音のうちで、最も後ろにある母音からその言語項目の最終音までの音の群に〈ṭi 韻〉という術語が与えられている。

現代の音声学において、音節内で核となる音に先行する子音は頭子音（onset）、音節をなす中核となる音（主として母音）は核（nucleus）、音節内で核となる音に続く音は末子音（coda）とそれぞれ呼ばれ、音節内の核とそれに続く末子音の部分は韻（rhyme）と呼ばれる。当該の〈ṭi 韻〉という術語が指示する部分は、まさしくこの韻が指示する部分に等しい。

なお、頭子音と末子音はそれぞれある場合とない場合があるが、音節の核は必ず存在する。末子音がない場合には、核の音だけが韻となる。これは〈ṭi 韻〉の場合も同じである。

【例】

agnicit「火〔の祭壇〕を積み重ねる者」における -it、somasut「ソーマを搾る者」における -ut

や、-ātām, -āthām（中動 3 人称・2 人称双数語尾）における -ām の部分は〈ṭi 韻〉と呼ばれる。

【規則】

1.1.65 alo ’ntyāt pūrva upadhā ||

/aL.ABL.SG antya.ABL.SG pūrva.NOM.SG upadhā.NOM.SG/

「最終音の直前の音は〈upadhā 次末音〉と呼ばれる。」

【略説】

ある言語項目を構成する音のうち、その最終音から数えて 2 番目に位置する音（penultimate）に〈upadhā 次末音〉（「〔最終音の〕そばに置き定められる音」）という術語が与えられている。

【例】

pac「煮る」における-a-、bhid「割る」における -i-、budh「目を覚ます」における -u- や、vṛt「回転する」における -ṛ- は〈upadhā 次末音〉と呼ばれる。

【規則】

1.1.66 tasminn iti nirdiṣṭe pūrvasya ||

/tad.LOC.SG iti nirdiṣṭa.LOC.SG pūrva.GEN.SG/

「ある要素が所格形で表示される場合、その要素の前の要素に対して操作が行われる。」

【略説】

文法規則において所格形がどのような目的で使用されるのかを定めている。すなわち、所格形によって何らかの要素が提示される場合、当該の所格形はその要素の前にある要素に対して操作が行われることを知らしめる。それゆえ、所格語尾が表す基本的な意味は「基体、場」（adhikaraṇa）であるが（2.3.36）、それが含意しうる意味の中で、文法規則内で与えられる語の所格語尾は「前」という場所を伝えることになる。

所格形によって表示される要素を L という記号で表すならば、当該規則が与える操作環境と操作結果は X→Y / __L（要素 X が要素 L の前にある場合、要素 X に操作が適用されて Y となる）と表すことができる。

【例】

6.1.77 iko yaṇ aci では、母音 iK（i, u, ṛ, ḷ）に対する半母音 yaṆ（y, v, r, l）の代置が規定されているが、所格形で提示されている aci は 1.1.66 によって「母音（aC）の前で」と解釈されて、操作環境が定められることになる。適用例である pacaty odanam「彼は粥を煮る」のように、pacati は母音の前で pacaty となる。

【規則】

1.1.67 tasmād ity uttarasya ||

/tad.ABL.SG iti uttara.GEN.SG/

「ある要素が奪格形で表示される場合、その要素の後の要素に対して操作が行われる。」

【略説】

文法規則において奪格形がどのような目的で使用されるのかを定めている。すなわち、奪格形によって何らかの要素が提示される場合、当該の奪格形はその要素の後にある要素に対して操作が行われることを知らしめる。奪格語尾の基本的な意味は「起点」(apādāna)であるが(2.3.28)、奪格形は文法規則内では「〜の後で」という特定の意味で使用されることになる。

奪格形によって表示される要素を A という記号で表すならば、当該規則が与える操作環境と操作結果は X → Y / A__ （要素 X が要素 A の後にある場合、要素 X に操作が適用されて Y となる）と表すことができる。たとえば、以下の例のように、odanám の後で pácati が pacati（低アクセント）となる。また、接辞をある要素の後に導入することを規定する場合にも、その要素は奪格形で表示される。

【例】

8.1.28 tiṅṅ atiṅaḥ では、動詞人称語尾（tiṄ）で終わる語に対する低アクセントの付与が規定されているが、奪格形で提示されている atiṅaḥ は 1.1.67 によって「動詞人称語尾（tiṄ）で終わらない語の後で」と解釈されて、操作環境が定められることになる。適用例である odanám pacati「彼は粥を煮る」のように、pacati は動詞人称語尾（tiṄ）で終わらない語である odanám の後で低アクセントをとっている。

【規則】

1.1.68 svaṃ rūpaṃ śabdasyāśabdasañjñā ||

/sva.NOM.SG rūpa.NOM.SG śabda.GEN.SG a-śabdasañjñā.NOM.SG/

「語はそれ自身の形を指す、術語の場合を除いて。」

【略説】

日常の言語運用の場では、通常、語からは語の語形とともに語の意味が理解される。語の形そのものを問題にしたい場合には、日本語では「牛」というように鉤括弧などを使ったりする。サンスクリット語では iti「という」が語の後に置かれることで、語の形そのものが問題となっていることが示される。

一方、パーニニ文典では、語が提示されるときには、たとえそれが iti を伴っていなくても語の形だけが指示されることが、本規則によって規定されている。逆に、iti がパーニニ文典中で使用される場合、それは語形ではなく意味が問題となっていることを知らしめるものである(たとえば 1.1.44）。文法規則中では語の意味よりも語の形を指示する場合が圧倒的に多いため、文典全体の簡潔さの観点から、iti の用法を通常の用法とは逆転させていると考えられる。

以上のようにパーニニ文典中で語は形だけを指すが、その語が文典中で規定される術語である場合には、その限りではない。すなわち術語は、術語の語形ではなく、術語に当てがわれた意味内容を指す。

これ以外にも、カーティヤーヤナは当該規則が当てはまらない事例を 4 つ挙げている。それによれば、2.4.12 で列挙される諸語は自らの形ではなく特定の対象の一種を指し（vt. 5 on A 1.1.68）、3.4.40 で使用される sva「自分の、財産」という語は自らの語形に加えてその同義語並びに特定の対象の一種も指し（vt. 6 on A 1.1.68）、2.4.23 で使用される rājan「王」という語はその同義語だけを指し（vt. 7 on A 1.1.68）、4.4.35 で列挙される諸語は 1 つの例外を除いて自らの形と特定の対象の一種を指す（vt. 8 on A 1.1.68）[35]。

【例】

4.2.33 agner ḍhak は、agni「アグニ（火・火神）」に接辞 ḍhaK（> -eya- 7.1.2）の付与を規定する。その結果、āgneya「アグニのための〔もの〕、アグニに捧げる〔もの〕」という語形が派生される。この語形は、たとえば āgneyam aṣṭākapālaṃ nirvapet「彼はアグニのための、8 つの皿に分けられた供物を捧げるべきである」（VŚ 1.17）などに観察される。この規則中の agni は「agni という語、agni という語形」を指し、その語の意味である「火・火神」を指さない。したがって、同じ「火」を意味する jvalana, pāvaka, dhūmaketu の語の後には接辞 ḍhaK は付与されない。しかし、たとえば 1.1.20「語根 dā および dhā は〈ghu グ〉と呼ばれる、dāP を除いて」によって定義された術語である〈ghu グ〉は、「ghu という語」ではなく、その術語が指すもの（語根 dā および dhā）を理解させる。

【規則】

1.1.69 aṇudit savarṇasya cāpratyayaḥ ‖

/aṆ-uT-it.NOM.SG savarṇa.GEN.SG ca a-pratyaya.NOM.SG/

「aṆ（母音、半母音）または指標辞 U を有する音は、それ自身とその同類音を指す、接辞の場合を除いて。」

【略説】

音素表で提示された母音と半母音が文法規則中で言及される場合、それらは音素表で提示されている音だけはなく、自らの同類音（1.1.9）をも指す。加えて、同じく文法規則中で何らかの要素に U という指標辞が付されている場合、その要素は、自らの音だけではなく同類音をも指す。ただし、文法規則内で言及されるものが接辞である場合、同類音への指示はなされない。

【例】

6.1.87 ād guṇaḥ「母音 a とそれに後続する母音にグナ母音が代置される」で言われる「母音 a」は 1.1.69 によって、母音 a 自身とその同類音（ā, a3, á, à, ã, ã̀ などの 18 種類）を指す。したがっ

[35] さらなる詳細については Sharma (1990: 69–70) を参照せよ。

て、6.1.87 は tava idam「これがあなたのもの」だけでなく、khaṭvā iha「ここにベッドがある」にも適用でき、それぞれ tavedam（-a＋i-＞-e-）、khaṭveha（-ā＋i-＞-e-）となる。指標辞 U をもつ音の例として、1.3.7 cuṭū「接辞の初頭に置かれる cU および ṭU は指標辞である」が挙げられる。ここで、cU, ṭU は子音 c, ṭ だけでなく、その同類音、つまり硬口蓋音（c, ch, j, jh, ñ）と反舌音（ṭ, ṭh, ḍ, ḍh, ṇ）のすべてを指す。しかし、たとえば 3.2.168 で規定される接辞 -u-（bhikṣ-u-「乞食」など）の場合、-u- は接辞であるから、その同類音（-ū-, -u3- など）を指すことはない。

【規則】

1.1.70 taparas tatkālasya ‖

/T̲a-para.NOM.SG tat-kāla.GEN.SG/

「T に後続される母音は、自身と同じ持続時間を有する母音を指す。」

【略説】

1.1.69 では、文法規則内で言及される短母音は自らの音だけではなく同類音をも指すことが規定された。しかし、もしその短母音に T という印が付されているならば、その場合、当該の短母音だけが指示対象として理解される。このことは、長母音でも同様で、もし長母音に T が付されていれば、その長母音だけが指示対象として理解される。T は、それが付された母音と同じ持続時間を有する母音だけを指示するための装置である。注意すべきは、問題となるのは母音の持続時間だけであり、母音が持つアクセントや鼻音性は考慮されないことである。したがって、aT と言われれば、長母音 ā や延長母音 a3 は指示対象から除外されるが、特定のアクセントを有する短母音の形（たとえば á）や鼻音化された短母音の形（ã）は除外されない。

「T に後続される母音」と訳した規則中の tapara には二通りの解釈がある（KV on 1.1.70 [I.29]）。1 つ目は、tapara を所有複合語として「T を後続要素とする〔母音〕」と解するもので、この場合、T は母音に後続することになる。上記の訳はこの第一解釈に従ったものである。2 つ目は、tapara を奪格限定複合語として「T に後続する母音」と解するもので、この場合、T は母音に先立つことになる。パーニニ文典中では第一の場合の方が多いと思われる。

【例】

7.1.9 ato bhisa ais は「母音 a（aT）で終わる名詞語幹の後で、第 3 格語尾 -bhis に -ais が代置される」ことを規定している。vṛkṣaiḥ「木（具格複数）」（＜vṛkṣa-bhis）におけるように、規則中の「母音 a（aT）」は、1.1.70 によって短母音 a のみを指す。

【規則】

1.1.71 ādir antyena sahetā ‖

/ādi.NOM.SG antya.INS.SG saha it.INS.SG/

「初頭の要素は、末尾の指標辞を伴ってその要素自身およびその間に含まれる全要素を表す。」

【略説】

パーニニ文典における短縮記号の作り方とその記号の指示内容が規定されている。列挙される一群の要素のうち、最初の要素は一定の群の中に含まれる何らかの指標辞と組み合わせられて短縮記号（pratyāhāra）を構成する。そうして構成された記号は、当該の最初の要素から始めて指標辞が現れるまでの要素すべてを指示するものとして機能する。

【例】

たとえば aC という短縮記号は、音素表の 1 列目の a から 4 列目の末尾に置かれる指標辞 C までの音（すなわち全母音）を表す。同様に haL は全子音を表す。また、sUP（主格単数語尾 sU から所格複数語尾 suP まで）はすべての名詞格語尾（4.1.2）を表し、tiṄ（3 人称単数能動語 tiP から 1 人称複数中動語尾 mahiṄ まで）は能動および中動の動詞人称語尾（3.4.78）すべてを表す。

【規則】

1.1.72 yena vidhis tadantasya ‖

/yad.INS.SG vidhi.NOM.SG tad-anta.GEN.SG/

「〔適用条件を課す〕x をもって規定がなされる場合、その x は、x で終わる要素を表す。」

【略説】

文法規則中で何らかの要素 x により文法規則に対して適用条件が定められている場合、その要素 x は、要素 x で終わる別の要素 y を理解させる。

【例】

3.3.56 er ac は、文字通りには母音 i の後に接辞 aC を導入することを述べているが、1.1.72 に従って規則中の「母音 i の後に」は「母音 i で終わる要素（ここでは母音 i で終わる動詞語基）の後に」を表す。たとえば、この規則によって、母音 -i で終わる語根 ji「勝利する、征服する」の後に接辞 aC が付与され、jayaḥ「勝利すること、征服すること」が派生される。

【規則】

1.1.73 vṛddhir yasyācām ādis tad vṛddham ‖

/vṛddhi.NOM.SG yad.GEN.SG aC.GEN.PL ādi.NOM.SG tad.NOM.SG vṛddha.NOM.SG/

「母音のうち、最初がヴリッディ母音である語は〈vṛddha 増大形〉と呼ばれる。」

【略説】

パーニニ文典において母音 ā, ai, au は〈vṛddhi ヴリッディ〉と呼ばれる（1.1.1）。この〈vṛddhi ヴリッディ〉という術語で指示される母音を最初の母音として有する語全体は、〈vṛddha 増大形〉と呼ばれる。

【例】

śālā「家」の最初の母音はヴリッディ母音であるので、この語に〈vṛddha 増大形〉という術語が与えられる。次に〈vṛddha 増大形〉と呼ばれる語の後に接辞 cha（> -īya- 7.1.2）の付与を規定する 4.2.114 が適用され、śālīyaḥ「家に属する〔もの〕」が派生される。

【規則】

1.1.74 tyadādīni ca ‖

/tyad-ādi.NOM.PL ca/

「tyad『それ』等の項目も〈vṛddha 増大形〉と呼ばれる。」

【略説】

1.1.73 に加えて〈vṛddha 増大形〉と呼ばれる項目をさらに規定している。

【例】

『名詞語基表』第 111 番目と第 241 番目の語群（GP 111, 241）に挙げられている項目、たとえば tyad「それ」、idam「これ」などの代名詞は、最初にヴリッディ母音を持たないにもかかわらず、1.1.74 によって〈vṛddha 増大形〉と呼ばれることになる（cf. 1.1.73）。したがって〈vṛddha 増大形〉と呼ばれる語の後に接辞 cha（> -īya- 7.1.2）の付与を規定する 4.2.114 が適用され、tyadīyam「それに属する〔もの〕」、idamīyam「これに属する〔もの〕」が派生される。

【規則】

1.1.75 eṅ prācān deśe ‖

/eṄ.NOM.SG prāk.GEN.PL deśa.LOC.SG/

「最初の母音が eṄ（e, o）で、かつ東の地名を表す語は〈vṛddha 増大形〉と呼ばれる。」

【略説】

1.1.73–1.1.74 に加えて〈vṛddha 増大形〉と呼ばれる項目をさらに規定している。

【例】

東の地名である eṇīpacana, bhojakaṭa, gonarda は、最初にヴリッディ母音を持たないにもかかわらず、1.1.74 によって〈vṛddha 増大形〉と呼ばれることになる（cf. 1.1.73）。したがって〈vṛddha 増大形〉と呼ばれる語の後に接辞 cha（> -īya- 7.1.2）の付与を規定する 4.2.114 が適用され、eṇīpacanīyaḥ「エーニーパチャナにおける〔もの〕」、bhojakaṭīyaḥ「ボージャカタにおける〔もの〕」、gonardīyaḥ「ゴーナルダにおける〔もの〕」が派生される（4.3.53）。

略号と参考文献

A: Pāṇini's *Aṣṭādhyāyī*. See Appendix III (Aṣṭādhyāyīsūtrapāṭha) in Cardona 1997.

AiG: *Altindische Grammatik*. See Wackernagel and Debrunner 1896–1964.

AVP: *Atharvaveda*, Paippalāda recension. See Bhattacharya 1997.

BM: Vāsudeva Dīkṣita's *Bālamanoramā*. See Caturveda and Bhāskara 1958–1961.

DhP: *Dhātupāṭha*. See Katre 1967.

GP: *Gaṇapāṭha*. See Böhtlingk 1887.

KS: *Kaṭha-Saṃhitā.* See Schroeder 1900–1910.

KV: Jayāditya and Vāmana's *Kāśikāvr̥tti*. See Sharma et al. 1969–1970.

MBh: Patañjali's *Mahābhāṣya*. See Abhyankar 1962–1972.

PIŚ: Nāgojībhaṭṭa's *Paribhāṣenduśekhara*. See Kielhorn 1868.

PM: Haradatta's *Padamañjarī*. See Miśra 1985.

ṚV: *Ṛgveda*. See Aufrecht 1877.

SK: Bhaṭṭoji Dīkṣita's *Siddhāntakaumudī*. See Caturveda and Bhāskara 1958–1961.

ŚKD: Raja Radha Kanta Deva's *Śabdakalpadruma*. See Deva 1967.

TS: *Taittirīya-Saṃhitā*. See Weber 1871–1872.

Uddyota: Nāgeśa's *Uddyota.* See Vedavrata 1962–1963.

US: *Uṇādisūtra*. See Aufrecht 1859.

VS: *Vājasaneyi-Saṃhitā.* See Paṇśīkar 1912.

VŚ: *Vaikhānasa-Śrautasūtra*. See Caland 1941.

vt.: Kātyāyana's *Vārttika*. See Abhyankar 1962–1972.

泉井久之助（1976）「8 言語研究の歴史　二、文法学の発現とパーニニ」大野晋・柴田武（編）『岩波講座　日本語 1　日本語と国語学』： 302–320。東京：岩波書店。

小川英世（2014）「パーニニ文法学〈言葉の領域外不使用の原則〉について―ディグナーガ「アポーハ論」の文法学派的解釈」『インド論理学研究』7: 53–78.

川村悠人（2021）「『言語学大辞典』所収「インドの言語学」に対する覚書」『ニダバ（*Nidaba*）』50: 50–63.

川村悠人（2022）「インドの言語学の理解に向けて（1）―パーニニとパーニニ文法」『ニダバ（*Nidaba*）』51: 23–39.

熊本裕（1996）「インドの言語学」『言語学大辞典』（第 6 巻 術語編）所収：83–100。東京：三省堂。

後藤敏文（1990）「インド伝統文法学をめぐって」『特定研究「近代諸科学から見たインド思想の批判的分析」報告書』所収：65–85。岩手大学人文社会学部。

辻直四郎（1974）「インド文法学概観―サンスクリット文法附録」『鈴木学術財団研究年報』11: 1–28.

吉町義雄（1995）『古典梵語大文法―インド・パーニニ文典全訳』東京：泰流社。

Abhyankar, K. V. (1962–1972) *The Vyākaraṇa-mahābhāṣya of Patañjali: Edited by F. Kielhorn.* 3 vols. Bombay: Government Central Press, 1880–1885. Third edition, revised and furnished with additional readings, references and select critical notes by K. V. Abhyankar. 3 vols. Poona: Bhandarkar Oriental

Research Institute.

Abhyankar, Kashinath Vasudev and J. M. Shukla (1977) *A dictionary of Sanskrit grammar*. Second revised edition. Baroda: Oriental Institute.

Allen, W. S. (1953) *Phonetics in ancient India*. London: Oxford University Press.

Aufrecht, Theodor (1859) *Ujjvaladatta's commentary on the Uṇādisūtras: Edited from a manuscript in the library of the East India House.* Bonn: Adolph Marcus.

Aufrecht, Theodor (1877) *Die Hymnen des Ṛigveda*. 2 Bde. Bonn: Adolph Marcus.

Bhattacharya, Dipak (1997) *The Paippalāda-Saṃhitā of the Atharvaveda*. Volume one consisting of the first fifteen kāṇḍas. Calcutta: The Asiatic Society.

Bloomfield, Leonard (1933) *Language.* New York: Henry Holt and Company.

Böhtlingk, Otto (1887) *Pāṇini's Grammatik*, *herausgegeben, übersetzt, erläutert und mit verschiedenen Indices versehen*. 2 Bde. Leipzig: Verlag von H. Haessel.

Caland, W. (1941) *Vaikhānasa Śrautasūtram: The description of vedic rites according to the Vaikhānasa school belonging to the Black Yajurveda*. Calcutta: Royal Asiatic Society of Bengal.

Cardona, George (1969) Studies in Indian grammarians I: The method of description reflected in the śivasūtras. *Transactions of the American Philosophical Society* (New Series) 59(1): 3–48.

Cardona, George (1976) *Pāṇini: A survey of research.* The Hague: Mouton.

Cardona, George (1984) On the Mahābhāṣya evidence for a Pāṇinīya dhātupāṭha without meaning entries. In: S. D. Joshi (ed.), *Amṛtadhārā: Professor R. N. Dandekar felicitation volume*, 79–84. Delhi: Ajanta Publications.

Cardona, George (1997) *Pāṇini: His work and its traditions*. Second edition, revised and enlarged. Delhi: Motilal Banarsidass.

Caturveda, Giridhara Śarmā and Parameśvarānanda Bhāskara (1958–1961) *Śrīmadbhaṭṭojidīkṣitaviracitā vaiyākaraṇasiddhāntakaumudī śrīmadvāsudevadīkṣitapraṇītayā bālamanoramākhyavyākhyayā śrīmajjñānendrasarasvatīviracitayā tattvabodhinyākhyavyākhyayā ca sanāthitā*. 4 vols. Varanasi: Motilal Banarsidass.

Chatterji, Kshitish Chandra (1948) *Technical terms and technique of Sanskrit grammar*. Part I. Calcutta: Visvanath Chatterji.

Deva, Raja Radha Kanta (1967) *Shabda-Kalpadruma: An encyclopaedic dictionary of Sanskrit words*. 5 vols. Varanasi: Chowkhamba Sanskrit Series Office.

Devasthali, G. V. (1967) *Anubandhas of Pāṇini*. Poona: University of Poona.

Joshi, S. D. and Saroja Bhate (1984) *The fundamentals of anuvṛtti*. Pune: University of Poona.

Katre, S. M. (1967) *Pāṇinian studies I*. Poona: Deccan College Postgraduate and Research Institute.

Katre, S. M. (1981) *A glossary of grammatical elements and operations in the Aṣṭādhyāyī*. Mysore: Central Institute of Indian Languages.

Katre, Sumitra M. (1987) *Aṣṭādhyāyī of Pāṇini*. Austin: University of Texas Press.

Kielhorn, Lorenz Franz (1868) *The Paribhāshenduśekhara of Nāgojībhaṭṭa*. Part I: The Sanskrit text and various readings. Bombay: The Indu Prakash Press.

Miśra, Srīnārāyaṇa (1985) *Kāśikāvṛtti of Jayāditya-Vāmana, along with commentaries Vivaraṇapañcikā-Nyāsa of Jinendrabuddhi and Padamañjarī of Haradatta Miśra.* 6 vols. Varanasi: Ratna Publications.

Ogawa, Hideyo (2005) *Process and language: A study of the Mahābhāṣya ad A 1.3.1 bhūvādayo dhātavaḥ.* Foreword by George Cardona. Delhi: Motilal Banarsidass.

Ojihara, Yutaka and Louis Renou (1960) *La Kāśikā-vṛtti (adhyāya I, pāda 1) traduite et commentée.* 1re partie. Paris: École Française d'Extrême-Orient.

Paṇśīkar, Wāsudev Laxman Shāstrī (1912) *Śuklayajurveda-Samhitâ (Śrimad-Vâjasaneyi-Mâdhyandina) with the Mantra-Bhâshya of Mahâ-mahopâdhyâya Śrîmad-Uvatâchârya and the Veda-dîpa-Bhâshya of Śrîman-Mahîdhara (with appendices & mantra-Kośha).* Bombay: Nirṇaya Sāgara Press.

Renou, Louis (1942) *Terminologie grammaticale du sanskrit*. 3 vols. Paris: Champion. [Reprint in one volume. Paris: Champion, 1957].

Renou, Louis (1948–1954) *La grammaire de Pāṇini traduite du sanskrit avec des extraits des commentaires indigènes.* 3 fasc. Paris: Klincksieck. Revised edition, 2 vols. Paris: École Française d'Extrême-Orient, 1966.

Roodbergen, J. A. F. (2008) *Dictionary of Pāṇinian grammatical terminology.* Pune: Bhandarkar Oriental Research Institute.

Schroeder, Leopold von (1900–1910). *Kâṭhakam. Die Saṁhitâ der Kaṭha-Çâkhâ*. 3 Bde. Leipzig: F. A. Brockhaus.

Sharma, Aryendra, Khanderao Deshpande, and D. G. Padhye (1969–1970) *Kāśikā: A commentary on Pāṇini's grammar by Vāmana & Jayāditya*. 2 vols. Hyderabad: Sanskrit Academy.

Sharma, Rama Nath (1990) *The Aṣṭādhyāyī of Pāṇini, Volume II: English translation of Adhyāya One with Sanskrit text, transliteration, word-boundary, anuvṛtti, vṛtti, explanatory notes, derivational history of examples, and indices.* New Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers.

Sharma, Rama Nath (1995) *The Aṣṭādhyāyī of Pāṇini, Volume III: English translation of Adhyāyas Two and Three with Sanskrit text, transliteration, word-boundary, anuvṛtti, vṛtti, explanatory notes, derivational history of examples, and indices.* New Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers.

Sharma, Rama Nath (1999) *The Aṣṭādhyāyī of Pāṇini, Volume IV: English translation of Adhyāyas Four and Five with Sanskrit text, transliteration, word-boundary, anuvṛtti, vṛtti, explanatory notes, derivational history of examples, and indices.* New Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers.

Sharma, Rama Nath (2001) *The Aṣṭādhyāyī of Pāṇini, Volume V: English translation of Adhyāya Six with Sanskrit text, transliteration, word-boundary, anuvṛtti, vṛtti, explanatory notes, derivational history of examples, and indices.* New Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers.

Sharma, Rama Nath (2002) *The Aṣṭādhyāyī of Pāṇini, Volume I: Introduction to the Aṣṭādhyāyī as a grammatical device.* New Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers.

Sharma, Rama Nath (2003) *The Aṣṭādhyāyī of Pāṇini, Volume VI: English translation of Adhyāyas Seven and Eight with Sanskrit text, transliteration, word-boundary, anuvṛtti, vṛtti, explanatory notes, derivational history of examples, and indices.* New Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers.

Thieme, Paul (1935) *Pāṇini and the Veda: Studies in the early history of linguistic science in India*. Allahabad: Globe Press.

Thieme, Paul (1985) The first verse of the *Triṣaptīyam* (AV,Ś 1.1 ~ AV,P 1.6) and the beginnings of Sanskrit linguistics. *Journal of the American Oriental Society* 105(3): 559–565.

Vasu, Śrīśa Chandra (1891) *The Ashṭādhyāyī of Pāṇini: Edited and translated into English*. 2 vols. Allahabad: The Pāṇini Office.

Vedavrata (1962–1963) *Śrībhagavat-patañjali-viracitaṃ vyākaraṇa-mahābhāṣyam (śrīkaiyaṭakṛta-pradīpena nāgojībhaṭṭa-kṛtena-bhāṣyapradīpoddyotena ca vibhūṣitam)*. 5 vols. Gurukula Jhajjar (Rohatak): Haryāṇā Sāhitya Saṃsthāna.

Wackernagel, Jacob (1918) Indoiranisches. *Sitzungsberichte der preussischen Akademie der Wissenschaften* (Berlin) 1. Halbband: 380–411. [= *Kleine Schriften* von Jacob Wackernagel, hrsg. von der Akademie der Wissenschaften zu Göttingen, 1963, 299–330. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht].

Wackernagel, Jakob and Albert Debrunner (1896–1964) *Altindische Grammatik.* I. Lautlehre, 1896, ^{2}1957, II.1. Einleitung zur Wortlehre, Nominalkomposition, 1905, ^{2}1957, II.2. Die Nominalsuffixe, 1954, III. Nominalflexion, Zahlwort, Pronomen, 1930, IV. Register von Richard Hauschild, 1964. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.

Weber, Albrecht (1871–1872) *Die Taittirîya-Saṃhitâ*. 2 Bde. Leipzig: F. A. Brockhaus.

Whitney, William Dwight (1889) *Sanskrit grammar: Including both, the classical language and the older dialects of Veda and Brāhmaṇa*. 2nd edition, Cambridge, Mass. [Reprint, Delhi: Motilal Banarsidass, 1962].

The World of Ancient Indian Grammatical Science I: An Annotated Translation of Pāṇini's Grammar (Sūtras 1.1.1–1.1.75)

Adam Alvah Catt
catt.adam.7c@kyoto-u.ac.jp
Yūto Kawamura
ykawamura0619@gmail.com

Keywords: Sanskrit, Pāṇini, grammar in ancient India, Indo-European, history of linguistics

Abstract

In this paper, we provide an introduction to the world of the *Aṣṭādhyāyī*, the renowned grammar of Sanskrit composed by the ancient Indian grammarian Pāṇini, and an annotated Japanese translation of sūtras 1.1.1–1.1.75. This paper is the first installment in our ongoing project to publish a complete Japanese translation of Pāṇini's magisterial grammar. The annotated translation consists of four parts: (1) a word-for-word gloss of the original Sanskrit text, (2) a translation of each sūtra, (3) a summary of each sūtra, and (4) examples of how each sūtra applies to actual linguistic forms. A comprehensive, accessible, and rigorous treatment of Pāṇini's grammar in Japanese has long been a desideratum, and it is hoped that this project will adequately fill this lacuna.